
BLEACH × とある魔術の禁書目録 Darkness World（黒キ世界）

kyouya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACHとある魔術の禁書目録 Darkness World
(黒キ世界)

【Nコード】

N4197N

【作者名】

kyouya

【あらすじ】

アランカル

護廷十三隊VS破面からまだたった半年・・・

ホロウ

一護は死神代行として虚を倒し続け、普通の生活を送っていた・・・

ホロウ

その一護に迫り来る、『死神を虚へと移す』力を持つ、強大な虚が

ホロウ

現れる！！

そして、ルキア達も動きだし、ホロウ虚討伐のため向かった先は・・・

ここに、世界に、右手1つで立ち向かっていた少年の町で、不可解なポルターガイスト現象が多発する。

科学の町で起こった謎の怪死。

死神代行と無能力者（レベル0）の少年が出会ったとき、物語は始まる・・・！！

死神ノ白・人ノ黒（前書き）

困ったな。書きたいことが山ほど出てくる。

小説書くことを楽しむためだけに書いた作品です。喜んでもらえればめっちゃくちゃ嬉しい！！

死神ノ白・人ノ黒

黒で塗りたくられた空の下・・・死装束に身を包む、ブラウン色の髪をした青年が、屋根を駆ける。

駆ける先には、仮面をつけた化け物が1匹。

その姿はすべてが異様。仮面をかぶった人間ならばまだしも、化け物なんて誰も見たことがないだろう。

・・・普通の人間には。

そこにいる青年は、背中にかけて、晒しでぐるぐる巻きにされた、バカでかい出刃包丁の取っ手を掴む。

すると自然と、その包丁の晒しはスルリと抜けて、月の光を浴びて鋭く光る刀身を露わにする。

その青年を見ると、化け物は青年に、低いうなり声を上げて襲いかかる。

大きな手に、鋭い爪を立てて、化け物は青年に斬りかかった。

斬！！

結果は見るより明らかだった。

化け物の爪はたたき折れ、出刃包丁が化け物の仮面に・・・顔に、縦に食い込む。

そしてそのままズバァ、と化け物の体は2つに両断され、そのままボロボロと黒い霧のようになって化け物は消えていった・・・

「ふう・・・今日はこんなところか。」

そういつて、青年はそのバカでかい出刃包丁を肩にかけて、暗くなつた町を眺める。

あの戦いから、まだ半年しか経っていない・・・
そのことに、その青年は実感がともわなかった。

その戦いで傷ついた町は、既にすべての復興を終えて、そんなことがあつたとは微塵にも感じさせない。

それがこの青年にとってはとても喜ばしいことだった。

・・・あとはこの虚^{ホロウ}という化け物さえいなければいいのだが。

「・・・まあ、完全に消すことは、人間がいなくなつちまうことを示すんだがな・・・」

独り言を言う青年。

そのまま、暗い町を夜明け前まで見ていようと、そこに座り込んだ青年。

このときだった。

「一護。ここにいたか。」

一護、という名前を呼ばれて、そのブラウン髪の青年はクルリと首を返す。

「ルキア・・・？」

そこにいたのは黒い髪をした、青年と同じく死装束に身を包む、ぱつと見青年よりも10倍生きているとは思えない少女。名を、ルキアというらしい・・・

「・・・またここにいたか・・・」

「・・・ああ。」

「・・・・・・」

そのまま、数刻ほど沈黙が続く。

この沈黙には、ルキアという少女の・・・一護という名の青年に対する礼儀があった。

そして・・・

「一護。」

「・・・なんだ？」

そして、その言葉に対する返事が、一護を驚愕させる。

ソウル・ソサエティ
「尸魂界に來い。」

はあ！？と素っ頓狂な声で返事をする一護。

「おい、待てよ、なんでいきなり・・・」

「話は後だ。早速行くぞ。」

「聞けよ！！なんで俺が・・・」

そんな一護の言葉も聞かぬまま、強引に一護を引っ張って、尸魂界
ソウル・ソサエティ
につながる門を開くルキア。

「人の話を聞けエエええエエ！！」

そんな声は全くスルー。

そのまま2人は門の中に飛び込んでいった（約一名無理矢理連れて行かれた）。

????????????????????

・・・ここは、科学で超能力を解明した町・・・
外とは30年ほどの文明の差があると言われる町、学園都市。

その町には、様々な学区が存在する。

ここはその学区の1つである、第七学区の一角・・・
人々は、刺激のあるこの町の中で、平穏に生きている。

朝日が現れたこの時間、そんな街頭の通りで、生徒達が今日も通学をしている。

そのまま平穏に今日の通学が・・・

バギヤアアアアアアア！！

どうやら終わらないらしい。

そこで通学している生徒達が、激しい轟音の聞こえた方向に、一斉に目を向けると・・・

バリヤアアアアアアア！！

目の前が真っ白になったと錯覚するほどの、激しい稲光。
そして・・・

「うオオオおおおおお！！？？」

「ちょっと待てコラア！！」

「んなこと言われて待つバカがいるかああアアア！！」

「あんたはそのバカに入ればいいのよオオオおお!!」

「それは無茶＋自分勝手な注文だこのやる才オおお!!!!!!」

口喧嘩しながらその通りを駆け抜けていく2人の男女。

1人はツンツンした黒い髪をした少年。

1人は茶色い短髪をした、とあるお嬢様学校に通う少女。

少女は額から高圧電流を発生させ、そのままツンツン頭の少年にその電撃を叩きつける少女。

バチリイイイイイ!!と凄まじい音を立てて電撃が少年に・・・

バキン!!と音を立てて消えた。

「くっそおおおお!!不幸だあああああああ!!!!」

悲鳴を上げて、その電撃少女から必死に逃げる少年。

その通りにいる生徒達は、そこにポカンと立ち尽くしていた。

・・・長い物語が、今始まることを、彼らは知らない。

死神ノ白・人ノ黒（後書き）

実は僕、ブリーチ好きです。

最近ブリーチのジャンプの展開が激しいけれど、どうなっていくんでしょう？

これは作者のオリジナル設定で物語を進めていくので、楽しんでいただければ幸いです！！

あと、これは『とある墮天使の聖戦』とは無縁で進めていくつもりです。ご了承ください。

絶望ト希望

人間界と同じような、青い空。

人間界にあるような、普通の世界。

違いがあるとすれば、その世界すべてが、れいし霊子で出来ていること以外、何も変わらない。

ここがソウル・ソサエティ尸魂界。魂の故郷。

ソウル・ソサエティその尸魂界で、

ドオオオオオオン！！

・・・ある戦いが始まっていた。

そこにいるのは、死装束を着た者達と、仮面を付けた化け物。

両者とも、お互いを殺し殺され、お互いの死体をそこに転がせていた。

「ちつ、想像以上に強いな。他の部隊の者もやられるわけだ。」

その戦場で、刀を振るい、白い服を死装束の上に羽織る、パツと見、12、3歳ぐらいの少年がそこにいた。

その少年は、

「霜天そうてんに坐せお???」

刀身を抜き、そしてそれを振りかざす????

「氷輪丸ひょうりんまる!!」

その瞬間????

ビュウオオオオオオオ!!

そこから冷気が吐き出され、すべてを凍らせる。

その冷気は、あまりにも無慈悲。刀の切っ先が向かった、そこにいるのは氷で動けなくなり、そのまま力ついていく虚ホロウのみ。

これが少年、いや、十番隊隊長、日番谷 冬獅郎ひつがや とうしろうの持つ、氷雪系最強の斬魄刀、『氷輪丸ひょうりんまる』。

しかし、

「ウオオオオオガアアアアアアアッ!!」

「くっ、」

それですら、相手をすべて仕留めるにはまだ力不足だった。

そして・・・

「隊長っ！！」

ある女性隊員が声を上げる。

「松本か、なにがあつた！？」

日番谷が松本という女性隊員に問う。

そしてその問いに、松本は大声で叫ぶ。

「ガルガンタから、更に多くの虚ホロウが入り込んできます、このままでは・・・ッ」

その言葉に、くそっ、と独り言を漏らす日番谷。
ガルガンタ。それは虚ホロウの住む虚圏ヴェコ・ムンドと現世を結ぶ道。

日番谷が左を見ると、空間がバツクリと裂けて、そこに黒い道が出て来ている。

そこからドロドロと黒い液体のようなものが流れ出るように出てきて、無数の黒く、10階建てのビルくらいはある巨大な虚ホロウが発現している。

それは、虚ホロウの中でも大虚に入る、『最下級大虚』ギリアンという虚ホロウだ。

その名の通り、一番弱い大虚だが、その数が1匹とか2匹とかという優しい数ではない。

その空間が、黒で埋め尽くされたと言っても過言ではなかった。

「くっ、こんなときに・・・ッッ!!」

そしてそちらに向かおうとしたときだった。

「ぐオオオああああああア!!」

1つの、布を引き裂くような鋭い悲鳴。

そしてその方向を、日番谷は見た。

そこにあつたのは、死神の胸に手を突き出している虚が一匹。
そして、その死神の胸には1つの穴があいていた。

その穴とともに、ある物がその死神の顔に浮き出てきた。

????^{ホロウ}虚の仮面????

「やめろおおオオオオオオオオ!!」

叫び、そこにかける日番谷。

しかし、そこにいた、日番谷を除く死神は理解していた???いや、彼もどこかで理解していたのかもしれない???もう間に合わない、と。

日番谷は氷輪丸を振り回す。

そして、圧倒的な冷気が辺りを支配する。

だが、そこにいた虚は簡単^{ホロウ}にそれを回避する。

その切先は、対象をかすりもせず、空を斬った。

歯噛みする日番谷。その彼に駆け寄り、暗い表情を浮かべる松本。

(く、そ・・・ッッ!!)

日番谷は死神を見る。

仮面が中途半端に出て、胸の孔から血がダラダラとただれていた・

もはや、助かるなどと誰も思わない、無惨な死骸がそこに転がっていた。

「・・・隊長・・・」

松本は声をかける。

だが、彼の顔は、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべていた。

そんなことをしている間にも、ガルガンタから虚^{ホロウ}がただれ、味方が次々と殺されていった。

「・・・弔いはあとでやる。今はこの状況を打破するのが先決だ・・・」

そしてその死骸に背を向けて、彼は空まで軽く跳ね上がり、空を駆け抜けて、氷輪丸を振るう。
そして、彼の後を追うように、松本も空を駆ける。

「唸れ???」

刀を抜き、刀身の峰に手を滑らせ、解号を唱える。

「灰猫!!」

その瞬間、刀が灰のような塵となり、それが虚^{ホロウ}に牙を向く。
その灰のような物に触れた瞬間、巨大な『最下級大虚^{ギリアン}』の体が縦に
真つ二つになった。

それでも灰猫は止まらず、1、2、3・・・と虚^{ホロウ}を消していく。
日番谷もそれに負けずに虚^{ホロウ}を氷塊にして、ぬくもりをすべて奪って
いく。

だが・・・

キイイイイイイイイ、と音が響くとともに、

ズドオオオオオオオオオ！！

爆音が響き、赤い閃光が地を走り、そこを跡形もなく消し飛ばす。
『虚閃^{セロ}』。

しかも一本ではなく、そこにいた、大地を黒く染めた巨大なギリア
ンがそれを発する。

いかに隊長格でも、それすべてを防ぐことは出来ない。

「ぐっ」

「隊長！！」

日番谷と松本は、その閃光に飲み込まれた・・・

バゴアアアアアアアアアッ！！

・・・轟音が響いた、とともに日番谷は目の前が真っ赤に染まるのを見た。

・・・だがおかしい。

痛みも何も感じない。衝撃波すら、すべてかき消されている。

（???何が???）

日番谷は、前を凝視する。

そして、目の前に黒い影があることを知った。

そして、それは片手ですべてそれを防いでいることを知る。

（なっ???)

そこから、何が起こったかを知る。

「よう・・・」

誰がそんなことをしでかしたのかを知る。

「久しぶりだなあ???’」

その黒い影は、オレンジ色の髪をしていた。

あの頃より、多少伸びた髪。

だが、この声と、隊長格に対する無礼な言動でわかる。

「冬獅朗。」

・ ・ ・ 死神代行、黒崎一護が、あいかわらずの馴れ馴れしい言葉で話しかけてきた。

・ ・ ・ 未だに発せられている、強大な、赤い『虚閃^{セロ}』を片手で防ぎながら。

―人間界―（ガクエントシ）（前書き）

どうしよう、こんなに期間が長くなるなら、文を短くしてでも早めに投稿すべきか？

そこらへん、ご意見ください。

―人間界―（ガクエントシ）

今日も太陽はまぶしく輝く。

今日も生徒達は自分の学校へと歩んでいく。

そして、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今日もこのツンツン頭の少年は、不幸オーラを身に纏う。
もはや不幸だと言う気力すら残っていない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

生徒達はみな、同じことを思う。
こいつ生きてんのか？

昨日も不幸のオンパレードだった、悲しい少年、上条当麻。

一日中電撃ツンデレ娘に追われ、その最中に財布を落とす。
そして食材に在庫はなく、その後、銀髪シスターさんにずっと頭を
かじられる。

そして朝起きた時には水で腹を満たそうとしていたシスターさんが、
水道管を見事に粉砕。

その余波で電化製品がほぼ全滅&部屋中水浸し。

しかもその後、理不尽にもシスターにグーで殴られた（服に水を含ませると、下になにもつけていない場合どうなるでしょうか）。

・・・これを不幸と言わず、なんと言う？

もはや精神的に少年はスタボロだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もはやオーラを身に纏うだけで、一言も喋らない。
そのときだった。

「いたいた、見つけたわよアンタ!!」

今日も彼に不幸の女神に愛される。

目の前にいるのは昨日の電撃娘、御坂美琴。みさかみこと

さっきまでまだ微かすかにあった、少年の目の生気が、一瞬で消え去った。

「今日という今日は、も、もう逃がさないわよ!!今度こそ・・・」

そうしてモジモジしながら少女が声をかけようとしたところ、

「なんか、誰かが落としたみたいなんだけど、わからなかったのよねえ。^{アンチスキル}警備員にでも出そうかと思っただけ、アンタのことで忘れ、て……ってどうしたの、アンタ？」

「……………」

いきなり黙りだした上条。未だに呆然としていて、他の生徒達が『おまえホントに生きてるか？』という目で見つめてきた。そんなことは蚊ほども気にせず、ゆっくりと御坂に歩み寄る上条。それを見て、御坂は少しおびえた目で上条を見る。そして上条が御坂の顔直前まで詰め寄ってきた。

（う、うわうわうわわわっ、なに！？なんなの、どうしたのよ、こ、こいつっ！！！？てか、か、顔が近……い……／＼／＼）

詰め寄られて、先ほどの引きつった表情から一変して赤面しだした御坂。

「ね、ねえ、アンタ……ホントにどうし」

「御坂……」

またいきなりしゃべりだした上条。
その言葉にヒヤッ、と声を出す御坂。

「な、なによ・・・?」

そして、おそろおそろ口を動かして、尋ねてみる御坂。
・・・このとき彼女は覚悟しておくべきだった。

そのときである。

一瞬で不幸オーラをすべて取っ払って、喜色満面の笑顔になった彼は、

「マジで最高だ御坂アアあああああッッ!!!!!!!!!!」

いきなり彼女に抱きついた。

はわわわわわわつつつ!!?!?!?!?!と奇声をあげる御坂を無視してマジで力強く抱きしめる上条。

「よかったよ、よかったよこんチクシヨウ!!なにが不幸な人生だ、俺はまだ幸運なんだ、ザマあみやがれ神様!!!!俺はまだ生きてるぞ、生きてるんだアアアアあああああ!!!!!!」

いきなり先ほどのどんよりした表情を一変させて、女性に抱きつき、意味不明の雄叫びをあげる男。
どこからどう見ても変態。

そして今日も、上条は

「なにしてんだこの猿人類がアアアあああああああ！！！！」

凄まじい威力の飛び蹴りを顔面にぶちかまされて、げふあ、と悲鳴をあげて吹っ飛ぶ上条。

そこに現れたのは、御坂の後輩（というか御坂のストーカー）であり、数少ない空間移動能力者の白井黒子だった。

上条のことなどまったく気にせず、御坂のもとへと向かう黒子。

「おおおおおおお姉様！？あんな猿人類と抱き合うなんてことをなさるのですか！！！？お姉様の初めては私の物だというのにイイイイイイイイ！！！！」

こいつも変人か！！と道端の生徒一同は強く思う。
そして肝心の御坂はというと・・・

「ふにゃー」

放心状態（なんか嬉しそうな表情に見えなくもない）まっただ中である。

その姿を見て、黒子は上条をギン、と見据え、

「よくも私のお姉様をオオオおおおおお！！！！！」

「お前にはわかるまい、俺が今どれだけ幸運だと感じているかわかるまい！詳しくはお前の大好きな先輩に聞きなさい白井さん！！」

「ふざけんなそのせいでお姉様がこの有様なのにそんなの許してたまるかアアアああああ！！」

そして彼女はあるものをに触れようとする。

スカートの下に隠していた、ホルダーのようなものに巻き付けていた鉄矢。

彼女はその一本に触れる・・・

ダダダダダッ！！

前に上条は走り出した。

彼女はテレポートの使い手なのだ。1次元ベクトルを駆使して物体を瞬間移動させる。

そして飛ばされた物は、もし飛ばされたポイントになにか障害物があった場合、その物の強度に関係なく、障害物を押し出そうとする。

つまりは人体にそれを直接ぶちこまれると・・・

「ワハハハハ、今のスーパーラッキー上条さんを止められる物など無いわ！！このまま一日過ごしてやるよハーハハハハハ！！！」

！
」

「待てこの猿人類がア！！」

そして今度は白井との鬼ごっこになったわけだが、いつも不幸だと
感じることもはやどうでもよくなってる上条。

そしてそのままそこに置いていかれた御坂は相変わらずふにゃー、
と言うだけでそこらへんに静電気を巻き散らかしている。

そんな彼らには、あるニュースは目に入ってこなかった。
彼らの上に浮かぶ飛行船に、こんな文字が浮かんでいた。

『謎のポルターガイスト現象、依然として解決のめど立たず』
『学園都市内で一般人20名余りが昏睡』

この原因を知る者は誰もいない。

強者（クロサキ・イチゴ）

日番谷は未だ信じられないでいる。
確かに黒崎は強い。それは認める。

だが・・・

（あの数の・・・ギリアンとはいえ・・・『虚閃^{セロ}』を片手で止める
だと・・・！？）

しかも、それだけではなかった。
彼の背中にある出刃包丁を見る。
これは、彼の斬魄刀・・・その姿は、

（しかも・・・始解^{しかい}・・・！？）

そんなときだった。

「よお、冬獅郎。久しぶりだなあ」

彼が話しかけてきたのは。
相変わらず無礼な発言を平気でするやつだ、と日番谷は改めて思う。

「・・・日番谷隊長だ・・・」

「・・・怪我はねえな？」

「・・・ああ、松本にもないようだ・・・ところで、朽木ルキアはどうした？」

「置いてきた。すぐに追ってくるだろ。ま、んなことはどうでもいい。冬獅郎、もう休んでろ」

「そんなこと出来るか、まだ俺は・・・」

そして彼は刀を握り、戦場を駆け抜け抜けようとするが・・・トン、と。

一護に手を抑えられた。

軽い力で抑えられているはずだが、まったく刀を上に向けられなくなった日番谷。

「なっ・・・」

「やめとけ・・・」

そして一護はひと呼吸置いて、日番谷に次の言葉をかける。

「お前まだ、藍染にやられた傷が治ってねえんだろ。」

その言葉に、ピクツ、と反応する日番谷。
彼の胸の部分を一護は見る。

そこは、戦闘で切り裂かれていないにも関わらず、赤い汚れが染み付いていた。

返り血ではない。これは彼の物だった。

彼は藍染に致命傷を負った。斬魄刀の能力によって、斬撃をそらすことは出来た・・・だがそれでも、あと少し右であつたら、心臓に直撃を受けていた。

それから半年経っている・・・しかし、藍染の霊圧によって、なかなか傷口は治らなかった。

そんな状態で、日番谷はこの戦場に赴いていた・・・傷が開いてもおかしくなかった。

「俺だつてそれほどバカじゃねえ・・・お前の動きでわかる。さつさとお前は休め」

「しかし・・・っ」

それでも日番谷は戦地に赴こうとするが・・・

「日番谷・・・」

不意に名を呼ばれて、顔を上げる日番谷。

そして一護の顔を見る。

表情は苦々しいものだった。

先ほど、あの虚^{ホロウ}に殺された死神に向けた彼の顔と同じだった。

「頼む・・・」

日番谷は、下を向く。

そして彼は、一護の目を見る。

彼の茶色の瞳が、日番谷に強く訴えかけていた。

「・・・わかった・・・」

そして日番谷は後ろに退くと、その体を松本が支えた。

「あまり無茶しないでくださいよ・・・」

「・・・ああ」

彼らは一護に戦場をゆだねた。

護廷十三隊の隊長が、死神代行に。

そこにあるのは、彼らの立場を越えた信頼。
そして、

「・・・一瞬で終わらせてやるよ」

一護は、背中の出刃包丁・・・彼の斬魄刀を抜く。

それは、晒さらしに巻かれた刀。

柄を持ち、それを引くと、自然と晒は紐解かれ、その鋭い刀身を、刀は露にする。

『斬月ざんげつ』。それが彼の斬魄刀の名前。

かつて藍染を斬り倒した、彼の相棒。

その刀は、太陽の光を受けて、まばゆく光る。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

ギリアンが叫び、一護に襲いかかろうとする。
そして一護は・・・

斬！！と。

その万単位で存在するギリアンを簡単に斬り捨てていく。

右に斬月を振ると、その黒い巨体は上半身と下半身に分かれる。縦に斬月を振ると、巨体とともに大地が深く抉れる。

一護は次に、斬月の晒を掴むと、それを振り回す。

遠心力とともに刀の一撃の重みは増し、それをギリアンに向かって放る。

その瞬間、轟！と。

飛び道具と化した斬月は、その強力無比な一撃を、縦一直線に放ち、ギリアンは塵と化す。

「・・・相変わらずあっさりとやってくれるな・・・」

「・・・これが・・・黒崎一護・・・」

そして一護は巨大な出刃包丁を手元へ戻す。

「終わりだ」

彼は刀を振りかざす。とともに力が急速に刀に集中する。

自らの霊力を刀に喰わせて、刃先から超高密度の霊圧を放出し斬撃を巨大化させて飛ばす斬月の能力・・・

「月牙・・・」

その斬撃は、青く光り、すべてを破壊する一撃。

「天衝！！」

げっがてんしょう
月牙天衝。

そしてその青い光は、地面を覆う黒を飲み込んだ。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・へっ、やっぱり俺ついてるよ。こんなにすぐに白井を撒くことが出来るなんて、幸運以外になんて言えるよ！？もう・・・最高だ！！」

上条当麻は、自分の高校の校門で、息を切らしながらも、自分のかすかな幸運に酔いしれていた。

・・・というか、いつもなら不幸だと思ふようなシチュエーションも、今の彼にはそう思わせることすら出来なかった。

「ワハハハハ、今日の上条さんはもう誰にも止められません！！今日一日は幸運に恵まれているに違いない！！そうに決まってるよ、

ハハハハハ！！！！！」

そして高笑いをしながら、上条は自分の教室に入った。

その途中、何人の変人扱いされたか、そんなことはもう上条は気にしてすらいない。

やっぱり彼は面白いな、と、ある先輩が上条に対して言っていたことも上条は聞こえていない。

ガラガラガラガンツツ！！とけたたましく音を立てて、思い切りよく戸を開ける上条。
その瞬間、

ゾクン！！と。

上条は凄まじい負のオーラを感じた。

ここにいるだけでダラダラと冷や汗が流れてくる。

足がガクガクと震え、その場で立つことすら出来ないかと思った。

鳥肌が立ち続けて、上条はここにいるのはヤバいと直感した。

・・・余談だが、ここにもしー護たちがいたら、^{ホロウ}虚の霊圧と勘違いしたかもしれない。

（い、いやツツ、今日の上条さんはスーパーラッキー状態のはずだ、こんなまやかしに惑わされんぞお！！足を前へ動かせ！！このまま土御門達と会って、スペシャルラッキーな一日を過ごすんだ！！！！！！）

そして彼はその霊圧・・・違う違う、負のオーラの流れに押されず、自分の席に向かう。
その途中だった。

「おはよう・・・カミヤン・・・」

「ツツ!!!!???」

上条は、後ろを振り返る。

そこにいたのは、上条のクラスメイトで、「クラスの三バカ（デルタフォース）」の一角と呼ばれている、青髪ピアス。そして土御門元晴。

「・・・今日もいい天気やなー」「だにゃー？」

「ウ、ウン、ソ、ソウデスネー？」

「・・・今日はカミヤんに、ステキな贈り物があんな。今日のお祝いや」

「・・・え？お、お祝い？な、なんだっけ、お、贈り物？」

とりあえず、贈り物をもらえということにはわかった。
何のお祝いだ？と一瞬上条は考えたが、

（いや、贈り物をもらえるなら、やっぱり今日の俺は最高だ！！）

すごい今日はポジティブな模様。

もはや何も考えずにラッキーな方向に考えるようになってしまっている、とっても幸せなキャラなようです。

「お祝いの品くれんのか、やっぱり俺は幸運だな！！で、いったい何くれるんだ！？」

その瞬間、さらに霊あ・・・じゃない、負のオーラを増大させる青髪ピアス・・・いや、クラスの全員。

「あはは、そんなに喜んでくれるんやったらよかったわあ、じゃあまず土御門はんから」

「・・・わかつたぜい、青ピ」

そして上条はそんなダークオーラの渦の中、土御門達の贈り物を楽しみにしていた。

（いやー土御門たちが贈り物くれるなんてなー。こんな日が来るとは・・・しかし、お祝いっていったいなんだ？何のことなんだろ、まあいい今日の俺は最高だ！！）

そのときだった。

ヒュン！！

「ぶオウおお！？」

上条の顔面めがけてナイフが飛び込んできた。

とつさに避けた上条。ナイフは壁に深く深く突き刺さり、シューシューと煙を出している。

もし上条が避けていなかったら・・・

「おいコラ土御門お！？いきなしなにしてくれん」

「ほら次いくでーカミヤん。」

そして待つてましたとばかりに青髪ピアスが金属バットをフルスイングしてきた。

また、上条の顔面をめがけて。

「うおおおおおおお！？」

紙一重で上条はそれを避ける。

空振りした青髪ピアスのバッドは凄まじい音を立てる。

こつちも土御門のナイフ同様、壁に衝突し、学校の壁を粉碎する。

「ななななんだなんですかこれはああああ！？俺なんかしましたかアアあああ！？？」

「はっ、なんやねんカミヤん。ここでしらきる気がゴラボケ」

「今日の朝はまたお熱い仲でしたにやゝこのクソボケカミヤん」

はあ！？と上条は素つ頓狂な声を出す。

「お熱い仲！？しらをきる！！？ここで上条さんに理解できない言語をしゃべるな日本語喋れこのやろっ！！」

「黙れカミヤん！！ネタはもうあがつてんやで男やったら腹決めろや！！！」

「いや、なんのことですかわかりません！！！！ちょ、土御門これドワイウコトナノ！？」

そして土御門はまた強烈に冷たいオーラを出すと、無言のまま1枚の写真を取り出した。

そこには、

「なあ・・・ここでカミさんと抱き合ってたのって、常盤台のお嬢様じゃないかにゃー、カミさん？」

あ、と上条は声を漏らす。

その瞬間、クラスみんながドス黒いオーラを吹き出すとともに、上条を睨みつける。

「へえ、朝でもこんなにアツアツってことは夜中とか夜中とか夜中とかもつとアツアツなんでっしやろうなあー？ええこらカミさん」

「なんでそこで夜中ばかり！？そして上条さんは究極の不幸に見舞われて、いろいろ精神的にスタボロだったわけでそこに事情が」

「不幸やお！？真面目にんなこと言ってへんよなこのカミさんゴルア！！！！」

「なんだよ何が間違ってるよ！！そして絶望に打ちひしがれた俺の目の前に、幸運の女神様が来てくださったぞ！！わかるかわかんないだらわかってたまるかこの幸せがアアああああ！！」

「そこまで腐ってるとは思わなかったぜえカミさん！！男の（嫉妬と言う名の）正義の鉄槌くだしてやらア！！！！」

「ああああああああくそオオおおおおお！！不幸だアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

その後クラス内で、とある生徒の絶叫（＋生々しい音）が響いたという。

始マリノ終焉（前書き）

うーむ30分しか書けないと完成すんのに期間がかかるのは当然ですけどね・・・その途中でこういう文章のほうがいいかな？ 思っているいろいろ変えちゃうんです。

言い訳させてください。更新遅れるわけの。

始マリノ終焉

ソウル・ソサエティ
尸魂界のとある地方・・・せいれいてい瀨靈廷と呼ばれる場所で、白い羽織を着た男が二人、将棋をさしていた。
1人は長い白い髪をした、不健康そうな男。
もう1人は、こちらもち長髪で、少し癖のついた黒い髪。白い羽織の上に女物の羽織を着て、女物の長い帯を袴の帯として使うなど、派手な格好をしている。

「・・・ねえ、浮竹」

「・・・なんだ、京楽」

白い髪をした、浮竹という男に、京楽という派手な服装をした男が話しかける。

言葉をかけられた男は、歩を一つ前に進める。

「彼は本当に来ると思っかい？」

黒い髪をした男は、金を左に動かして駒を取り、飛車が京楽の王将に襲いかかれるようにした。
それを見て、白い髪の男は唸る。

「・・・さあな。こればかりは彼の心境だ」

苦心の末、王を逃がすことにしたようだ。
それを見て、フツと笑う京楽。

「・・・まあ、来る方が高いかな。来ないとしてもルキアちゃんなら引きずってやってきそうだ」

うむむ、としかめつつらのまま唸る浮竹。

「はは、それもそうだな」

そして京楽が角をつまみ上げる。
すると浮竹が『あっ！』と小さく悲鳴をあげた。

「それ、王手・・・」

今まさに、駒が王手をかけようとしたその時だった。

ガン！！と。

激しい音とともに将棋盤が激しく揺れ、駒が派手に地面にぶちまけ

られた。

今度は京楽が悲鳴を上げる番だった。

「隊長、黒崎一護が見えました。さっそく一番隊隊舎に移りましょう」

「ちよつ、七尾ちゃんなにすんの！？　せつかく僕勝ちかけてたつてのに『知りません。行きましよう』なんでそんなそそくさと行くのさねえ待つてよ七尾ちゃん！？　マイプリティ七尾ちゃん！！？　？」

「早く行きますよ隊長」

無視ですか！？　と叫ぶ京楽。

1人クスクスと笑う浮竹はご機嫌のようだった。

「まあとりあえず早く行こうよ、彼女ご立腹そうだから」

「ねえ、僕がいったい何したっていうんだよ七尾ちゃあああん！！」

「仕事さぼって私に押し付けた罰です。こんなんじゃまだまだ足りません仕事もつとやってもらいますよ」

「そんオゴゴゴゴゴゴゴ！！　ひっ、引っ張らないでのびちゃうつてやめてええええええ！！」

なかなかこちらに来ないのでもう引きずっていくことにした七尾。その様子を見てまた笑うのを禁じ得なかった浮竹だった。

「まったく貴様ときたら、なぜそんなにせっかちに行くのだ!! 最初は説明するまでこっちに来ないと言っておきながら、日番谷隊長が危機に陥っていると知るとすぐに行きおつて!!」

「だ、だってよあ、そうしねえとあれはやバかっただろおゴゴゴゴゴゴ!! ちょっ、ルキア、ひ、引きずるな顔顔顔オオおおおおおお!!」

一番隊隊舎の廊下を、顔面をズリズリ引きずられながら通る一護とルキア。

その途中何人かにその姿を見られて、クスクス笑われ密かに心が傷ついていく一護。

「ええいさつさと来い!! こんなことをして私が笑われ者になっていることがなぜわからん!! 朽木家の恥とする気が貴様!!」

「笑われてんのはお前じゃねえ!! 俺だアアあああああああッッ!!」

そんな様子で放り投げるように隊長の会議の広間に入った一護。

「くっそルキアのやつ、あとで覚えてやがれ・・・」

そうして自分の服についたほこりを払い、そこに立つ一護。

そこには12人の、白い羽織を着た人間がいる。そこには先ほどの浮竹や京楽もいる。

奥に1人の老人が立っていた。

杖について立っており、白髭が長く垂れている。

左腕を失っていること、白い羽織をいっていること以外は一見普通の老人だ・・・しかし、明らかに違う。

ここに立っているだけでヒシヒシとプレッシャーが伝わってくる。
そこらにいる死神や虚には到底出せないであろう強い存在感のようなもの・・・それがその老人から痛いほど伝わってきた。

「よく来てくれた。黒崎一護」

この男こそ、この瀟靈廷を守護する護廷十三隊の中で、一番隊隊長に所属する、すべての死神の頂点に立つ男、

「この護廷十三隊一番隊隊長、山本源柳斎重國、こたびの助力感謝致す」

「いいつて。冬獅郎がヤバかったんだ、それくらいするさ」

・・・護廷十三隊で一番威厳ある人なのに思いつきし私語を使うこの男。

そこにいた京樂は隠そうともせずそこでハッハッハと笑い出した。外でこっそり聞いていたルキアは卒倒しそうになったりしていたのはまた別のお話。

「・・・それで、今回はいったい何のようなんだよ」

「黒崎一護。もう少し慎んで発言しろ」

口を割って入ってきたのは、髪をおかっぱのようにした女性。
隠密機動総司、二番隊隊長の碎蜂サイフオンだった。

「いや、こっちは無理矢理引きずられて連れてこられて訳わかんない状況だぜ？　んなこと言われたって・・・」

「・・・そういう行為が死を招くわけだが・・・？」

「よいよい。今回はこちらも説明をしなかったわけだ。仕方のないことだ」

元柳斎が抑えて、やっと後ろに退いた碎蜂。ソイフォン

まだ納得はしていないようだが、総隊長の指示なので諦めたようだ。

そして、一護は元柳斎にことの成り行きを聞こうとして、口を開いた。

そのときだった。

「おいおい、話す前に1人忘れてもらっちゃ困るんだけどな」

不意に背後から聞こえた声。

だが一護は別に驚くことも無かった。

「なんでそんな大切な話に遅れてくるんだよ」

「しょうがないだろ。夏梨と遊子を寝かすのに一苦労だったんだから」

「黙れこのヘンタイ。もう子離れしやがれ」

「ええっ、そんなあ!？」

なぜなら。

「そんなあじゃねえだろ！！ あんたには羞恥心つてもんがねえのか！？」

「一護、おまえはあの2人の可愛さがわからんのか！？ おまえとは別格のあの？？」

「うつせえ！！」

この声の主を、彼は誰よりもよく知っていたからだった。

「・・・つたく、もう少しカッコつけねえと六番隊に示しがつかねえんじゃないのか？」

「ふふん、みんな子供思いのいいパパだと言っていたぞ？」

「陰で悪口たたかれてるなこりゃ」

「なんだとう！？」

・・・目の前にいたのは。
無精ひげをはやした男。

現世である医院を開業したある男。

「・・・遅えんだよ・・・親父」

黒崎一心。

一護の父親だった。

「・・・はあ」

深いため息をつく。

今までなにを浮かれていたんだろう。

所詮自分に幸運なんて来るはずが無いのに、どうして俺はあんなハ
イテンションだったんだろう。

「・・・神様は気まぐれだな・・・幸運と不幸を0対10の割合か
ら1対1にするなんて、なんで俺ばっか・・・」

「・・・ホンマになんでカミヤんばっかあんな素敵な思いをすんね
ん・・・」

後から続けてきた声に対して、クラスのみんなが頷く。

「なあ、今のってそんな素敵な思いだったか？ ホントにそう思っ
てるなら30倍ぐらいにして返そうか？」

「ハッ、何言ってくれてんねんボケカミヤん。そんなん決まってる

やるホンマに何言っ てんねん嫌味かコラぼてくりまわすぞそれ通り越してクラス全員（担任含む）で集団リンチぶちかますぞ」

「すげえマシンガントーク！！ そんな3大テノール歌手びつくりの野太い声でそんな大阪のおばちゃん的なこと＋ドM発言されたらちよつと引くぞ！？」

目線と不気味な笑みで、黙れぶち殺すぞと以心伝心で伝えてきた青髪ピアス。

それとともにクラスみんなもうんうんと頷く。

ここにはまともな人間が1人もいないと確信する不幸少年・上条当麻。

「・・・はあああああ」

もう一発ため息。

高校生にしては、というか少年にしては妙に人生の厳しさを知っているような感じに聞こえる重いため息だった。

「はい、みなさん今日も一日おつかれさまでしたのですよー？」

突然、小学生の女の子が出すような声が聞こえてきた。

上条が前方を見ると、そこには小学生の女の子・・・ではなく、上条のクラスの担任教師・月詠小萌がいた。

これでも立派な成人なのだが、その背の丈といい、顔といい、どこからどう見ても中学生どころか、小学生にすら見えてしまう。

（余談だが青髪ピアスはロリコンなのでこの先生もストライクである。）

そんなスーパー不可思議先生が可愛らしくテコテコと歩き、教卓に上がり、終令を行う。

「では今日はこれまでなのですが、みなさんに忠告があるのでですよ」

「忠告？」

反応する上条。

その様子を見て、青髪ピアスがまたとんでもない発言をする。

「カミヤーン、それってカミヤンがフラグ立てた女の子がここに進行してくるとかそんなんか？ よっしゃこれで死亡フラグも成立したでよかったな全フラグ成立の一步や」

「デメエはそろそろそれから離れろ！！」

「上条君。キミには。失望した。」

「ちよつ、なに言い出すの姫神！？ なにそのオーラ、悪霊が取り憑いてんぞ絶対！！」

「嫉妬と言つ名の。怨念。」

「ひいつ！？ 姫神様小度は随分ご機嫌斜めなご様子でええええええ！！？？」

「ち、違うのですよー？ ほら、最近意識不明の昏睡状態に陥る人とか、ポルターガイスト現象とかで大騒ぎじゃないですか。その方で学生にも注意が出されることになったので、みんな気をつけるですよってことです」

「ポ、ポルターガイスト？」

「はい。どうも何も起こってないはずなのに突然何かが壊れたり、道路が崩れたりする事件が多発してるらしいので、いろいろ注意すべきなのです。それに・・・」

「それに？」

「突然、何の前触れも無く人が意識不明になる事故まで起こっているらしいのです」

「はあ？」

突然、何の前触れも無く人が、意識不明？
クラスはそのことで少しざわめきだした。

「先生、原因ってなんなんですか？」

クラスの中でカミジョー属性完全防御を誇る女、吹寄制理が小萌に尋ねた。

カミジョー属性とは簡単に言つと男の憧れである（わからない人はその純粹さを大切にしてください）。

その質問に、苦い表情をする小萌。

それが、その、と口ごもるばかりでなかなか言い出せないでいる担任。

（・・・わかってない、のか・・・？）

・・・科学の街であるこの学園都市でも解析できない原因不明の昏睡、そしてポルターガイスト現象。

（・・・まさか・・・）

ツンツン頭の少年は、ある答えを導きだす。

上条に、ドツと冷や汗が吹き出す。

（こりゃあ・・・俺の出番か・・・？）

そして神妙な顔つきになる上条。

土御門にもこのことは聞いた方がいいかもな、と思っていたそのと

きである。

「はっはぁーん。なるほどわかったでえー？」

いきなり青髪ピアスがこんなことを言い出した。
その一言は、たちまちクラスメイトの注目を集める。

「先生、被害受けたのみんな女の人やる？」

「え、な、なんでわかったんですか！？」

「え、ちょ、青ピーということだにゃー！？」

「貴様、なぜわかった！？ クラスの3馬鹿の1人なのに！？」

「理解。不能。」

いろんな人から注目を受けた青髪ピアス。

そして上条もそれに食らいつく。

「おい、青ピーどういうことだ、説明しろよ！！」

そして、不敵にニタア、と笑い出した青髪ピアス。

「なにとぼけとんのお、カミやぁん？」

「・・・はい？」

その一言でまたクラスの間みんながざわつきだす。

上条は土御門と小声で話し出す。

「（おい、もしかして青ピィまで魔術側の人でしたーなんて言わねえだろうな！？ 土御門！！）」

「（いや、そんなはずはないはずだけにやー。でもなんで女ばっかってわかったんだ・・・？）」

「（それだよ、なんでそんなことアイツにわかんんだ？）」

すると、土御門がハッと声を上げた。

「（・・・？ 土御門、どうした？）」

「・・・女・・・だと・・・？」

その一言に青髪ピアスは反応し、クルッと首をこちらに回す。

「・・・そうや、土御門はん」

「え、な、なに？ え、なに意気投合してんのお二人さん!？」

そして、青髪ピアスはある言葉を強調して言い放つ。

「・・・『女』や」

そして、

「・・・女・・・？」

「女って・・・？」

「女だと・・・？」

・・・、

ガダン!!!! と。

いきなり周囲のクラスメイトが立ちだした。

「!?!?!?」

その様子を見て驚嘆する上条。

なぜか周囲のやつらは俺を囲み出した。

そしてみんなが俺を睨んでる。

目が殺気こもっててめっちゃおっかないです。

「な、なにになになになんですか！！　お、俺え！？」

素っ頓狂な声を出す上条。

さつきとは違う意味でドツと汗が吹き出てくる。

バクバクと心臓が脈打ち、あたりに緊張感が立ちこめる。

「カミヤーん白状しろや。今回はかりは許されへんでえ？」

「朝に続いてこれか。あつぱれ見事だギネスに載るぜいカミヤん」

「・・・あの、何が言いたいのかまったく理解できないんですが」

「・・・うん、死ね」

いきなり鉄拳が上条の顔面に飛び込んできた。

「ぶゴウおオオオ！！??」

「カミヤーん、いくらなんでもフラグ立て過ぎでこれはないでえ」

「一回も二回も三回も死んでもらう必要ありだぜいこりゃあ」

意味わかんねえこというんじゃないねえ！！ と叫ぶ上条。
その様子を見てあたふたする小学生教師・月詠小萌。
みたいな

「え、な、何の根拠があつてそんなこと言つんですかみなさん！？」

その言葉に、二人は首をグルン！！ と勢いよく回して小さな成人を見る。

「・・・先生、わからん？ 『女』やで・・・？」

「・・・え・・・？」

そしてその言葉とともに、小萌は、

「・・・まさか、上条ちゃん・・・？」

フラフラと揺れてそこにペタン、と座り込む小萌。

「・・・カミジョー属性か。女に手え出しまくってたってわけか」

「それで。他に浮気しているとバレて。女の子はショックを受けて。昏睡」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・、

「・・・・なあ、青ピ―」

「・・・・なんやカミヤん」

上条の額に青筋が走る。

右手の拳はきつく握られている。

「・・・・まさか・・・・そんな理由で？」

その言葉に対し、青髪ピアスはハッ、と鼻から息を出し、胸を張って言う。

「当たり前や。こんなカミヤん以外に誰が」

「その幻想をぶち殺す！！」

いきなりわけの分からない言葉とともに右拳を顔面に突き出す上条。

一発KOを喰らい、顔がすごいことになっている。

「今度という今度はもう許さねえぞ！！ 俺を女つたらしみたく言うんじゃないぞコラ！！」

「うつせえ、自覚ないのか！？ いいやそれは嘘だぜい！！ カミヤんは俺たちが必死こいて努力して泥水すすってる時に1人ほくそ笑んでたんだ！！ んなの誰が許すか！！」

「テメエ被害妄想が酷いぞコラ！！ もういいそんなちっぽけな幻想は自分でなんとかしろこのクソヤロウ！！」

「あ、ちょ、待てカミヤん！！」

そのまま逃げるようにして下校した上条。

ズンズンとした足取りで、小萌の終令すら聞かずにエスケープ。

この後小萌が泣き出して、クラスメイトVS上条の鬼ごっこが始まるのはまた別の話。

始マリノ終焉（後書き）

クロスオーバー作品で書きたい作品が一つあります。

またかなり後で書くことになるでしょうけど、とりあえず予告だけ。

・・・人体錬成に巻き込まれた・・・

西の旅をしていたとき、ある男が行おうとしていた。
止めたくても止められなかった。

そして術が発動し・・・そして・・・

「また来ちまったのか？」

「・・・みたいだな・・・」

「何を代償にする？　・・・といっても、まず扉がなかったな・・・

」

「・・・このまま、俺ここで死ぬのか？」

「・・・そうだな・・・」

「扉、作ってやろうか？」

「・・・は？」

「そのための代価が必要だが・・・うん、こついつのが面白いかな・・・」

「お前の人生をもらおう」

そしてたどり着いた場所は・・・

「・・・おい、お前何してんだ？」

とあるツンツン頭の少年と、錬金術師が巡り会ったとき、物語は始まる・・・！！

誠に勝手ながら

すいません。

学校での成績が思うようにあがらず、これからの勉強の都合からどうしても小説を書く時間がなくなってしまうことになるのです。

つきましては、小説の執筆をしばし休むことになってしまいました。こちらでも大好きな小説執筆を休止してしまう事態となってしまうたことを残念に思います。以前から執筆のスピードも落ち、読者の皆様にご迷惑をかけていましたが、なにとぞご配慮していただきたいと存じます。

ですが、小説は必ず完結するまで執筆いたします。それまで、しばしばお時間をください。

応援してくださった皆様、この小説を愛読していただいている皆様、本当に申し訳ありません。

またいつか、この小説が執筆できる日を、筆者も心待ちにしております。

再度、このような事態になってしまったことをお詫びいたします。

申し訳ありませんでした。

k
y
o
u
y
a

不幸（前書き）

書体ちょっと変えてみました。

縦書きで見たら結構いいと思うんですけど・・・

縦書きへの直し方、知らないorz

不幸

「まったく、土御門の奴ら、しつこく俺を追ってきやがって。俺が
いったい何したっていうんだよこんちくしょう!!」

上条当麻は、現在絶賛逃亡中である。

彼自身はまったく見に覚えがないが、彼はクラスのみんなを敵に
回してしまっている。原因としては・・・まあ、彼の人権を尊重し
て敢えて伏せておく。

「あー、のども乾いちまった。どつかに自動販売機でもねえかな
ーなんてそんな素敵なこと、不幸な上条さんにあるわけ・・・」

上条の目線が止まる。そこにはなんと都合よく設置された自動
販売機。

・・・・・・

（これはあれですね買おうとしたらぶっ壊れて破損の弁償させら
れるとかいうパターンですねきつとそうだよそうに決まってんだろ
それしかない生まれてこの方がいいことなんて全然なかった不幸12
0%の上条さんにそんな素敵イベントああ自分で言ってて悲しくな
ってきちゃったあはは涙が出てくるよ父さんうふうふふふ）

端から見ると精神異常者の彼は、とっても不幸なのでこんなひね
くれた思考しかできない。

だが、のどがカラカラなのも事実。しょうがないので買うことに
しよう。もう試練でもなんでもばっちこいだ。

（・・・もう、土御門たちが来るとか喧嘩上等のお兄さんが出て
くるとかビリビリ中学生が出てくるとかはやめてください。それ以
外ならもう上条さんなんでもいいんでせう）

財布の中を点検する。

小銭もお札もなかったが、カードはある。電子マネーでなんとか
できるだろう。残金もまだ十分あるはずだ。

恐る恐る自動販売機に向かう。

・・・、何も起こらない。

（え、マジ？ 何もないの？？ 生まれてこの方不幸の星に生まれてきた上条さん、やっと平凡になれたの！？ 今日はお祝いだすき焼きだインデックスになんでも食わせてやろう今日は祝日だどどんと一発奮発してもいいだろあははハッハハハハハハハハハハッ！！！）

そしてカードを自動販売機のスキャナーに通した。
すると、機械音がピーツと鳴り、

「データが読みとれません。強力な磁気によってカード内のデータが破損している可能性があります。お客様のカードはご使用できません」

「はははは、は。・・・は？」

・・・え、なに？ 何が起こったの今。でーたはそん？

と、しばらく考えて思い出した。

そういえば、この財布ってビリビリに拾ってもらったんだっけ。

そしてビリビリの能力って、エレクトロマスター発電能力だったっけ。それって確か

電磁波も操れちゃう能力で無意識のうちに出しちゃってるものなんだっけ。

「・・・は、あはは、はあああああああああああああ
あ！？」

また不幸ですかーっ、そうですかーっ！！ とうなだれる上条だが、彼の不幸はこんなものではなかった。

ガゴッ！！ と、痛々しい音をたてて上条の後頭部に野球ボールがぶちこまれた。

「はあっ！？」

そしてその拍子に右手でぶん殴ってしまった。自動販売機を。手

を握らず。

「ばっ、みゃああオオオオオオオオオオオオアアアああああああああああ！！」

思いつき突き指した右手に痛覚信号が次々と伝わってくる。

ふういぎいいいいいつつ！！ と声にならない悲鳴をあげる上条。

と、そのとき。

ピービビビビ、とまた機械音が聞こえてきた。

「エ、らー発せ、い。機械、の、機関部、に損傷あ、り。そう、急な、修理、ひつ」

ボーン。と最後に爆発したっぽい音をだしてその自動販売機は静かになった。

・・・とどのつまり、ぶっ壊れた。ただの高校生の、しかも突き指の拳打で。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおああああああああああああああああああ！！！！ ふこおおおおおおおおおおああああああああああああああああ！！！！」

なんでだーっ！！ とツツコまずにはいられない。自動販売機が、しかも学園都市製のものがなんでこの程度でぶち壊れるのかわからなかった。

上条はまだ知らなかった。その自動販売機が常盤台のお嬢様によつて何度も蹴り飛ばされているという事実を。

普通、学園都市内の機械とかは壊れるとすぐに警備員アンチスキルが駆けつけてくる。こんなところを見られてもしたらその時点で即終了。前半はクラスメイト、後半は警備員アンチスキルと鬼ごっこを興じることとなつてしまった上条だった。

ぜえー、ぜえーと息を切らす上条。

一言言った瞬間、ゼンマイが切れたように黙りこくった上条。

ハイ、スイマセンデシタ。

「まあカミヤん。気分が沈んだときこそメイド服妹が一番の薬だぜい、おすすめするにゃー」

「不幸＋ろくでなしの二連コンボに耐えられる自信がないので遠慮しとくよロリコン軍曹君」

「ロリコン軍曹はやめるぜよ！！ 次言ったら口でも息の根でも全部止めてやるぜい！！！」

はー、と重々しいため息をつく上条。

「・・・で、小萌先生の元へ連行するならするでさっさとしてくれ、今日こそは俺、インデックスに幸運を呼ぶおまじないでもしてもらっ」

もう人生を完璧に諦めた目をした上条。さあ不幸でも何でもどんとこい、道連れにしてやるぜ、と意気満々(?)だ。

「いやー、これは学校生徒の一人ではなく、魔術師土御門元春としての願い入れだにゃー」

ピク、と。上条が反応する。

土御門元春。彼は学園都市の一生徒であるとともに、ある裏の顔を持つ。

背中刺す刃、天才陰陽師博士、多重スパイ土御門元春。

彼は今、その裏の顔を上条に向けていた。

「・・・なにかあったのか？」

「なにかあったもなにも、カミヤんも知ってるだろ？ 学園都市内での生徒昏睡事件」

「・・・また魔術師のしわざなのか？」

これまで上条は幾多もの魔術師と死闘を繰り広げてきた。

必要悪の教会、ネセサリウスローマ正教、アステカの魔術師、ロシア盛教、神の右席。

もはや魔術サイドで上条は名が知れ渡っている。

ほとんどの戦いで、上条は勝ってきた。右手に宿る、異能力なら何でも打ち消してしまう、その右手一本で。

また魔術師ならば、ここでもまた戦いが始まる。

戦う覚悟をして、土御門に尋ねた上条だが、

「わかんねー」

あつさりど、返事が返ってきた。

「・・・は・・・はあ!？」

素っ頓狂な声を出してしまう上条。

「だからわかんねーんだぜいカミヤん。魔術師かもしれないしそうじゃないかもしれない。今回はちつとばっかし奥が深いぜい」

「奥が深いって・・・学園都市で原因不明ってことは魔術しかねえんじゃ・・・」

「そこなんだよ。科学サイドでも原因不明。だが、魔術サイドでも原因不明なんだ」

さらつと言葉を放つ土御門。

「魔術サイドでも、原因不明？」

「おうさ。別段これといった魔術の形跡はない。なのになんでか昏睡してんだ。こりゃヴェントのしわざかと思われたけどそうでもないさそうなんだにゃー」

ヴェントとは、神の右席の一人。神の右席とは、人間の原罪から完全でなくとも解放されることで天使に近い存在となり、天使の術式を駆使する集団。

司る天使は、断罪の天使ウリエル。自身に敵意を向ける者を次々と昏睡させていく「天罰術式」を使う。

「犯人がヴェントでなくても、ヴェントならなんかわかるんじゃねえか？ 同じような力の持ち主なんだろ？」

「いや、と土御門は否定する。

「極秘で見てもらったが、どうも違う。本人も相手が何を司るのが見当がつかないらしい。それに百歩譲ってヴェントなら、学園都

市の住民全員に影響を及ぼすようにしてるはずだ。女ばっか狙うわけねえぜ」

確かに、と上条は頷く。

そもそもヴェントの天罰術式は、女ばかりを昏睡させる術式ではない。相手が敵意を自分に向けた瞬間にあいては昏睡する。そこに男女の差も何もないのだ。

「てか、そーいやって学園都市ばつかに被害が出たんだ？」

「他の地域で被害が出てもいいのに」

土御門は手をあげて首を横に振る。わかんねえ。

「だがまあ、おおよその答えは、現在の時点でわかってることから推測できる。被害者が学園都市の女ばかりで、しかも学生ばかりか。^{アンチスキル}警備員や教職員の連中はまったく被害を受けていない」

「……超能力者？」

ああ、と土御門は答える。

「たぶんそれが答えだろうな。じゃなきゃ他の地域で被害が出ないのは説明できない。ま、なんで超能力者で、女ばっかなのかは未だ不明」

そうか、と上条はつぶやく。

「それでな、カミちゃん……」

と、土御門が何かを言おうとしたそのとき、携帯の着信音が鳴り出した。

土御門のものだった。

「お？
なんだにやー？」

そして携帯を開いた瞬間、

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

喜色満面オーラが土御門から飛び出した。

神光臨キターッ！！！！と叫ぶロリコン変態士御門元春。

「ぶお！？ つつ、土御門！？ なんだよいったい！！」

「ねーちんですたい！！　ねーちゃんが俺の携帯にかけてくるなんていったい何事かによー心配だぜいキャツホー！！！」

じゃあそのガッツポーズはなんだよ！！ と上条はツツコむ。
「つーか義妹一筋のロリコン軍曹の誇りはどこにいった！！」
「な、何言ってるんだぜいカミヤン！！ ロリコン軍曹、くっ、それはもうホントにやめるにゃー！！」

ねーちん、とは神裂火織かんざきありのことだろう。土御門と同じくイギリス清教の信徒で、世界に数十人しかいない聖人の一人。力は教会十指に入る女性で、二メートルもある令刀「七天七刀」しちてんしちとうを使う。

「はいはい土御門元春ぜよ！！ 何のようかなねーちんデートならいつでもオーケーだにゃ・・・ん？」

が、すぐに土御門の表情が変わった。クラスの三バカの一人から、魔術師土御門元春へ。

「・・・ああ、例の事件か？ それで、どういった結果が出たのかにゃー？」

そしてしばらくの間、神裂の話が続いたのか、静かだった。

「・・・そうか、女に関してなら、そういう結果が出たか・・・ん？」

そして、またしばらく会話が続くのかと思われた。

が、

「・・・なんだと！？」

突然の叫び声。表情は驚嘆、焦燥。

「・・・わかった、すぐそっちに向かうぜい」

パクン、と携帯を閉じた土御門は、

「カミヤン、すぐに第七学区の公園に向かうぞ」

上条にそう言うと、いきなり走り出した。

「え、あ、は！？ おい、いきなりどうしたんだよ！？」

「公園で魔力らしき反応ありだ！！ だが魔術者じゃない！！」

やつらだ!!!」

~~~~~

「???つうことで、あの虚は俺がすべて払うことは出来た。けど、他の連中は・・・」

「よい。此度の被害はすべて儂に責任がある。そのことでそなたを責めたところで状況はなんら変わりません」

黒崎一護は山本総隊長に事の次第を話していた。

「あいつら一体なんなんだ? 虚みてえだけど違う。かといって破面でも仮面の軍勢でもなさそうだったぞ」

この疑問に対し、山本源流斎は、

「うむ、そちらについては十二番隊に調べてもらってある。現在のわかっておることとしては、朽木隊長に教えてもらおうかの」

そうすると、朽木白哉は前へ出て、話し出した。

「まずは、奴らが出現した時期から話そう。奴らが現れたしたのは二ヶ月ほど前から。当初は破面と思われていたが、霊圧はそれとは違う・・・その疑問に対し、我々はある答えを得た」

そして、次のことを付け足した。

「特殊な能力として、死神を虚に変えてしまう者がいる。そしてその手法で虚に変わった者も、同じ力を得る」

このことで、一護は表情を変えた。

「死神を、虚に?」

「そうだ。仮面の軍勢などもいるが、それは死神と虚が混在して



いるようなもの。だかこれは、完全に死神から虚へと変貌している」  
そういえば、死装束を着た虚がそこにいたことを一護は思い出す。

「なるほどな。違和感の正体は・・・」

「死神から虚へと移り変わったことがそれだろう」

死神から虚<sup>ホロウ</sup>。死神と虚<sup>ホロウ</sup>が混在する破面とも、仮面の軍勢とも違う亜種。

だが、と白哉は付け足す。

「すべての死神に実行できることではないようで、できるものとできないもの両方がある。できるものは何の問題なく虚<sup>ホロウ</sup>になるが、できないものは・・・」

「・・・死んじまう、ってことかよ・・・」

白夜はなにも答えない。だが、この問いに対する回答は、間違いなくイエスだろう。

しばらくすると、白夜がまた話し始めた。

「現在の被害状況としては、すべての隊で四十名あまりが転換され、うち半分が死亡、半分が虚化<sup>ホロウ</sup>した模様。敵は虚<sup>ホロウ</sup>でいうと、ほとんどがアジューカス級の強さを誇る」

以上、と最後に言うと、白哉は後ろへ下がった。

「さて、現在どこにやつらが潜んでおるかは見当がついておる・・・が」

と、山本源流斎は一護を見た。

「・・・？」

「主に一つ聞いておきたいことがある。消えたはずのその死神の力、一体どうやって復活させた？」

すると、全員が一護に視線を集中させた。

この一連の事件、最大の疑問。

それは、黒崎一護の霊圧復活。

一護は藍染との戦いで、霊圧を失うことと引き替えに彼を倒した。そうして放った最後の月牙天衝により、完全に彼の死神の力は消えたはずだった。

なのに、彼はたった半年で力を取り戻していた。

「・・・復活させたのがそんなにいけねえことか？」

一護が聞き返すと、源流斎は首を横に振った。

「それが問題なのではない。復活させた方法を聞きたいだけじゃ・・・もし、万が一その方法が重罪に当たることならば、我らは主を裁かねばならん」

沈黙が、その場を支配する。

源流斎の問いに、一護は沈黙していた。

「・・・一護」

すると、先ほどまで沈黙していた一心が口を開いた。

「黙っててもバレることだ。今のうちにばらしとけ」

「・・・オヤジ・・・」

ためらう素振りを見せる一護。

その一護を、父親の寛大な目で受け止める一心。

「まあ、もし処罰されるなら親父も同罪だ。最後に一暴れつてもいいかもな」

一心のその一言にギョツとする一護。

もう一度一心の目を見た。先ほどとまったく目の色は変わらず、覚悟を決めていることが嫌でもわかった。

「おいおいおいおい、待てよ！俺はそんなつもりで」

「一護」

また、一心が言葉を放つ。

「兄の役目は弟や妹を守ること。それと同じように俺も、自分の子供を守る親父っていう役目があるんだよ」

思わず一護は言葉をつまらせた。

一心の覚悟。一護にも兄として弟や妹を守る役目があるように、一心には『親父（一心）』の役目がある。

「それに」

と、一心は続ける。

「きつとわかってくれるさ。こいつらはお前を知っている。お前の『それ』で、簡単にお前の見方を変えたりしねえよ」

ポン、と一護の肩に手を置く一心。

少しの間の静寂。

うつむいていた一護は、

右手を、顔の右上をひつかくように動かした。

その瞬間、ドグンツ、と何かが脈打った。

「黒、崎・・・？」

「・・・こりやまいったねえ」

日番谷、それに続いて浮竹が、一護を見て呆然としていた。

彼らだけではない。碎蜂、白夜、源流斎、その場にいるすべての隊長が、息をのんだ。

「・・・それは、」

と、続こうとした源流斎の言葉を、

「裁くならあとで裁いてくれ」

一護が静かに、しかし懇願するように止めた。

「・・・こうするほかに、あのときは何もできなかった・・・だが後悔しちやいねえ。あとでなんとでもしろ。だけどこれだけは言わせてくれ」

そして、一護は続ける。

「俺のコレに、誰も関わっちゃいねえ。俺の意志でやったことだ」

またしばらくの沈黙。

そして、その沈黙を源流斎が破った。

「よいじやろう。今は何も言わん」

その瞬間、その場が安堵で包まれた。未だ驚愕の色を隠せないでいる隊長が多かったが。

そんな中、一護は単刀直入に源流斎に尋ねた。

「・・・奴らの潜伏場所ってのは？」

その問いに、源流斎は少しためを置いて、

「場所は東京都、学園都市」

静かに言い放った。

それが、すべての始まりだった。

## BLEACHの次回予告的なもの

ルキア「一護、学園都市とはなんだ？」

一護「東京都の1/3を占める面積で人口の約八割が学生、学校が多く集中して一個の街になった変わったところだつてよ。科学技術が俺らのところより二、三十年は離れてるとか」

織姫「そんなに離れてるならきつとものすごいよ！！ きっと

空飛ぶ車とか芸人とかいるんじゃない!？」

茶渡「空飛ぶ犬もいるかもしれないな」

ルキア「空飛ぶチャップーは当然いるだろうな!!？」

一護「知るか!!」

## 不幸（後書き）

訂正箇所！

一心の隊と白夜の隊を間違えました。

一心、ホントは五番隊です。直します！！

## 正体（前書き）

あまり書けてないです。来週は続きもつと書きますから許してください！>（――）<

これから先急展開の大連続、物語の進行スピードに遅れることなかれ！！

## 正体

どうして？ どうして？

「はあ．．．はあ．．．」

帰り道が悪かったの？

「——はっ．．．はあっ．．．」

今日はいつもの買い物帰りだった。

格別たまごが安いと聞いて走ってきて、その他にいくつかのおかずも買って上機嫌だった。

「——あ」

そして帰り道で、私は公園を歩いていた。

そしたら．．．そしたら．．．

「来ないでよ．．．」

自分に、迫ってきたのは。

なんなんだろうか。

「来ないでよ．．．！」

逃げ回る私を狩るべく狙い続けているのは。

「来ないでよオオおおおお！！！」

佐天涙子さてんないは逃げる。

自分に襲いかかってくる虚ホロウから。

「このあたりだ！ カミヤん！」

土御門が息を切らしながら叫んだ。

上条を置いていかんほどの勢いで疾走した土御門についていき、疲労感満杯の上条だったが、首を左右に動かして周囲を見渡した。

「ど、どこだ．．．？ どこに、魔術師は．．．」

と、その瞬間。

地面に激震が響き渡り、轟音が空気を乱暴に震わせた。そして。

土御門は、人間のものとは思えない唸り声を聞いた。

「今のは・・・!？」

声が聞こえた方向に目を向ける。

すると、そこには、

「っ!？」

土御門は信じられないものを見た。

それは、人と同じように腕と足が二本ずつある。だが、その体つきは人のそれとは思えないほど異常な発達をしていて、人間というよりゴリラに近い。

顔には奇妙な仮面。その表情は狂気とも憤怒とも嘲笑とも言えない。

これだけ人間と違うというのに、

「・・・胸に、穴・・・？」

仮面。胸の穴。異常な身体。

もう人間とは言えない。一番合う言葉は――バケモノだ。

「来ないでオオオおお!!!!」

と、呆然としていた土御門を、少女の悲鳴が目を覚まさせた。

「カ――」

ミヤん、と土御門は続けようとした。

だが。

「・・・あいつ、何にあんなに怯えてんだ？」

は？ と土御門は思わず声を漏らした。

こんなところで上条は何をふざけているのか、バケモノに気づいていないという。



「おいカミヤん、何言つてんだ？ あそこに仮面付けたバケモンが・・・」と言った土御門に、「はあ？ そんなのどこにいんだよ？ いりゃわかるだろ？」上条は、冗談でもなく、そう言い切った。

そこまで言われて、土御門はハツとした。

土御門にも。あの少女にも。あのバケモノが見えてるのに。

上条にだけ、見えていない。

「おいカミヤん、ふざけてないよな？ あれが見えないなんて・・・」

再度、土御門は尋ねる。

「だからあれってなんだ？ さっきから何の話してんだよおまえ」  
返事はノー。

(・・・どういうことだ？)

確か事件は正体不明のポルターガイストということになっていたはずだ。しかしあんなにもハッキリと相手が見えているのはなぜだ？ それなら事件はバケモノが引き起こす暴走事件となるはず・・・

(いや、カミヤんは見えていない・・・だが俺と、少なくともあの女の子は見える・・・見えるやつと見えないやつがいる？)

よく考える。何かあるはずだ。

俺たちと上条、そして他の見えない連中に・・・

(・・・？)

・・・俺たちと、上条？

何が違う？

魔術？ 超能力？

・・・魔力と、AIM拡散力場？

その単語で、土御門はハツとした。

「そういうことか・・・っ!!」

謎を解き明かした土御門。

見えない連中と見える連中の違い。

「おい、さつきから一人でなにブツブツ喋ってんだ!? なにがなんだか・・・」

「カミヤん! こいつらはここの学生が魔術師なら見える! だがカミヤんだけは見えねえのはその右手のせいだ!」

突然、土御門が意味のわからないことを言い出した。

「はあ!? 意味わかんねえこと急に言い出すなよ!」

すると土御門は、懷から紙を取り出した。

そこには何か字が書いてあるようだったが、字が昔の書物のように崩れた漢字で書かれていて何が書かれているかさっぱりわからなかった。

だが、こんな状況で、土御門が使うものといえばひとつしかない。

「魔術!?!」

上条はギョツとした。

魔術とは、科学と相反するもの。

もし科学サイドの超能力者が使用したら、

血管や神経がズタズタになる。

「土御門、おまえ」

土御門を止めようとする上条。だが、上条の言葉を遮って土御門は、

「説明の暇はない! 目の前のあの子を救いたければさつさとあの子のところへ行け!」

大きな声で怒鳴った。

「なっ??」

「聞こえなかったのかカミヤん!? テメエはさつさとあの子の元に行け! 犠牲者出してえのか!」

上条は、何も反論できなかった。

土御門の言葉が、無視できるような生半可なものではなかったか

ら。

「・・・で」

—— も、と続けようとした上条。

だが、言葉が喉元で止まった。

土御門が、彼を殺さんとはかりに睨みつけてきたのだから。

「邪魔だ！ さつさと行け幻想殺し！」  
イマジンブレイカー

そう言う頃にはもう、土御門は術式を発動させようとしていた。

「カミヤん、」

そして、

「バケモンをカミヤんにも見えるようにしてやるから、そいつを  
右手で思いつきりぶん殴れ！！」

## 正体（後書き）

ルキア「ええい一護め何をしている！ 上条と土御門は既に戦闘準備にかかっているぞ！」

一護「それがよ、筆者が来週テストであんまり書けねえなんて急に言い出しやがって」

上条「なにい！？ 俺らの活躍が異様に少ないと思ったたらまた kyouya のバカがあ！？ アイツなにやってんだ！！！」

土御門「あのやろう小説家をなめてんだろ！ いっちょ制裁してやるにやー！！」

ルキア「白漣で校舎を凍りづけにしてくれるわ！！」  
はくれん

土御門「赤ノ式で家をぶっ飛ばしてやるぜい！！」

ルキア「一護、貴様も月牙天衝で kyouya を斬り裂いてしまえ！！」  
げっがてんしやう

kyo・一護「やめろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
おおおお！！！！」

## 「ヒーロー」(前書き)

意外といっぱい書いたつもりでも、あんま書けてないもんなんで  
すね

b y k y o u y a

「ヒーロー」

「い、は、あ」

呼吸が乱れる。肺が痛む。足が悲鳴を上げる。

佐天涙子は、化け物としかいいようのないモノから、必死に走って逃げていた。

仮面を付けた化け物は、相変わらず佐天を執拗に追いかけている。獲物が自分以外にいないからなのか、それとも自分で遊んでいるのかは定かではない。

だが、今の佐天にとってそんなことはどうでもいい。

（こ、ないで・・・）

要は、化け物が自分に襲いかかろうとしている。

そいつは人間よりずっと強くて、自分は勝てない。

そいつは、本能をむき出しにして、自分に牙を向いている。

そいつは、「化け物」である。

それだけで、十分だった。

それだけで、逃げる理由には十分だった。

（こないで・・・！！）

それだけで、弱い彼女が追いつめられるには、十分だった。

もう、鬼ごっこは何分続けているかわからない。気がつけばこんな公園に来ていた。

ときわだい  
常盤台が誇る、超能力者（レベル5）第三位とともによく通っていた、ここへ。

（・・・助けて）

別に、彼女を捜していたわけじゃない。

（・・・助けて・・・）

別に、彼女に助けてもらおうとしていたわけじゃない。

(・・・誰か・・・)

別に私は、

自分の友達に、化け物から自分を守ってほしいと懇願したかったわけじゃない。

(・・・御坂、さ・・・)

私は。

友達を、犠牲にしたくはない。

「う、うううううううううう!!」

弱い自分が憎かった。

こんなにも弱くて、何もできなくて、人に頼ることしかできない自分が悔しかった。

今の自分は何だ？

自分が可愛いから、大切な友達を犠牲にしてまで生きようとする最低な人間ではないのか？

そんな自問自答で、佐天は自分に絶望した。

と、その瞬間。

轟!!! と。衝撃波が発生し、ベンチや自動販売機が粉々になった。

「あうっ!!」

佐天は横殴りに飛ばされ、うつ伏せに倒れた。

(な・・・にが・・・)

ゆっくりと、顔を起こす佐天。

ギョツとした。

まるでそこにレーザー砲が直撃したかのように、公園の庭が直線上に吹き飛んでいたのだから。

(な・・・に、これ・・・?)

何が起きたのか全くわからなかった。もしかして、アンチスキル警備員が駆けつけてきてくれた? と一時は期待する佐天だったが、その淡い期待は一瞬で消し飛んだ。

その砲撃の跡をよく見ると、化け物が基点に立っていたのだから。  
「……は？」

彼女がもし死神だったなら、これが虚<sup>ホロウ</sup>の放つ虚閃<sup>セロ</sup>と呼ばれるものだということを知っていただろう。

が、それを知らない彼女からしてみれば、化け物が正体不明の砲撃を放ってきたのと同じ。

未知の恐怖が、崩れかけていた彼女の精神を一気に壊した。

「あ、あ……」

怖い。

怖い。怖い。

そこにいる、正体不明の化け物が。

そして、その化け物がこれから自分に何をしてくるのか。

（　　もう　　ダ　　メ　　）

彼女は、恐怖に屈服した。

もう、無理だ。

所詮、こんな私が努力したところで何になる？

- - 戦って勝つ？

論外。身体能力のスペックが違う。

- - 逃げる？

どこに？　どうやって？　何を使って？

戦う・逃げる。この二つが選択できない時点で、もう終わっている。

生きる権利は、ない。

化け物は自分の目の前に立って、ジロジロと自分を眺め始めた。

そして、口を大きく開けると、深紅の光る球体が出てきた。

きっとこれが、公園を薙払った閃光の正体だろう、と佐天は呆然と思った。

……きつと、自分は消える。

跡形もなく。

（……何にも無くなっちゃうんだろうな……私）



そう思うと、自分の思い出が次々と脳裏をよぎった。

まるでデジタルカメラで撮影した写真をスクロールで見ているように、流れている時は何とも言えない気分だった。

最初は自分の家。

それから、憧れの学園都市に入ったときの自分。

中学校に入学して、すぐの自分。

それから・  
・  
・

(  
・  
・  
・  
初春  
)

自分の、大切な親友の、名前。

「才才才才才才才才才才才才才才才才！！！」

鼓膜を突き抜け、脳を揺さぶるような叫び声。

その声が聞こえた時はすでに、彼女は目を閉じていた。

次の瞬間、紅色の閃光がまばゆく走り、彼女の五感は消えた。

バギン！

突然、ガラスが割れたような音が鳴り響いた。

$$\begin{pmatrix} \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ ? \end{pmatrix}$$

奇妙な音が聞こえてから、  
1秒、2秒、3秒……

( $\cdot \cdot \cdot \bar{e} ?$ )

おかしい。もう、あの閃光が放たれてから十秒は経った。

あの深紅の光の威力ならば、もう知っている。現に公園は地面が  
 決られ、土が盛りかえって醜態をさらしていた。

それは自分も例外ではない。おそらく、上半身が消し飛び、下半身だけが肉塊として残る。

なのに。

まだ、自分は生きていた。

(・・・なん、で・・・)

瞼を、開く。

絶望で堅く蓋を閉められた扉を開くようで、佐天は少し、高揚した。

「まったく、なにこんなところでへこたれてんだデメエ！」

佐天は、きよとした。

目の前にいたのは化け物ではなく、ツンツン頭の高校生だった。でも。

「おい、まだ立てんだろ！ 立ってさっさと逃げろ！」

片手で、すべてを消し飛ばす閃光を防ぐその姿は。

「おい、シカトすんな！ こうしてんのも結構キツいんだよこっちは！」

みんなの憧れる、ヒーローみたいだった。

「む・・・無、理です・・・」

やっと、その一言だけが口にでた。

「ああ！？ 立てねえのか！？ しょうがねえなあ、そこ動くなよ！」

そして、そのヒーローは化け物へと向き直と、

「オオオオおおおおおおおおおおおッッッ！！！！」

ギギギガガガガガッ！！と。

赤い閃光が、魔法の消しゴムで色をかき消されていくように消えていく。

その、一見ただの右手で。

高校生の右手で、すべてが飲み込まれていくっ！！

「つつらあ!!」

バギッ！ と最後に破裂音を起こして、閃光は消えた。  
そして、右手が滑り込むように化け物の仮面へ直撃した。

## 「ヒーロー」(後書き)

一護 「いよいよ次は俺の出番だな。次の展開でいよいよ俺が出るはずだ！」

上条 「台本に『作者の都合につきこんだけしか書けませんでした。よって一護の活躍は次々回になります』って書いてあるぜ」

一護 「k y o u y a アアあああああああ!!!」

無能力者（レベル0）（前書き）

k y o 「遅れちった。どうしよう、ジャンプの作家たちって賢いな」

上条「今度から月曜日に書くことにしますっていつてますコイツ」  
黒崎「次週はキッチリ頼むぜ」

k y o 「テスト&研修旅行で書く暇が全くない」

黒崎「月牙天衝オ!!」

k y o 「ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

## 無能力者（レベル0）

化け物は、もがく。

仮面はあっけなく割れて、顔を手でおさえようとするが、それも少しの間だった。

次の瞬間、化け物は風に飛ばされる塵のように消え去った。

「…おい、あんた大丈夫か？」

上条は、佐天にそう聞いた。

「えっ？ あ…はい…」

一瞬ビクツとしたが、彼女はおどおどして答えた。

「そっか。じゃ、立つ…のは無理か。ホラ」

彼はそつと、彼女に手を差し伸べた。

「あ　ありがとうございます」

恐る恐ると手を伸ばす佐天。が、手が震えてなかなか掴むことができない。

と、そのとき上条が佐天の手を強く握り、彼女を持ち上げた。

「ひゃっ！？」

上条は佐天が立つのを手助けしようとしただけにすぎない。だが、佐天にとってこれは予想外のことで、思わず足が滑ってしまう。

「な——！？」

上条は焦り、腕を彼女に伸ばす。

間一髪、彼女は転けることはなかった。

上条に、お姫様だっこをされる形で支えられた。

「お、おい、大丈夫か？　無茶はすんなよ？　まだ震えるなら…てか、あのー、なんでそんな顔真っ赤にするんでせう？」

佐天は、固まったまま何も言わない。

何か話そうにも、口を開いた途端にボン、と爆発してしまいそう

な気がする。

（あー、なんですかこの雰囲気。この場にいるだけでこんな恥ずかしい気分なんでせうか）

お互いに言葉を交えることもできない二人。こんなところを自宅の暴食シスターさんにも見られれば死亡フラグは必死である。

気まずい時間が、ただただ流れていった。

まずい。この状況はマジでヤバイ。

そう思っていたその時だった。

。

上条の携帯の着信音が、ちょうど良いタイミングで流れてきた。

「あ、ちよつと悪いけど、降りてもらっていいか？」

「あ……はい……」

と、上条はだっこしていた中学生を降ろした。その時、佐天が一瞬惜しそうな表情をしたことに首を傾げながらも電話に出た。

「あー、どなたですか？」

「ラブラブなところしつかりと見せてもらったぜい〜？ カミヤ

あ〜ん？」

ゾツとするような恨めしげな声で出てきたのは、土御門元春。

「あ、あー、ど、どうしたんですか土御門君？ いきなり何を」

「とぼけんなよカミヤんさっきの様子バツツチリビデオカメラ

に納めさせてもらったぜい誰に見せようか禁書目録か小萌先生かい  
アンチスキル ジャッジメント

や警備員や風紀委員にでも差し出せばいいか一回捕まっちゃまえやア

アアあああああああ！！！！」

「テメエいつたい俺に何の恨みをもってそんなことしやがりますか——ツツ！？」

ぐわーっ！！ と頭を抱える上条。様子を横から見ている佐天はキョトンとしている。

「はっ、いいなあカミヤんはそうやってフラグ連発彼女作りたい放題生け贄は悪友血みどろの俺はお前のおいしいところを齒がみして

眺めるだけこの上条が、ホント上条だなデメエは！」

「上条ということ自体を全否定！？　つーか俺のことを軽い最低の男みたいに言うんじゃねえぞ！！」

「うるせえ！　この後黙ってぶん殴られりゃあいいんだデメエは！　今度クラスで公開処刑するから覚悟してやがれえ！！」

「理不尽！　と叫ばずにはいられない。もはや横の佐天は不振人物を見るような目でツンツン頭の少年を眺めていた。

はぁー、と上条はため息をついた。

「つーかまだ俺は状況が全然わかってねえんだ。そっちの説明してくれよ」

「ちつ、まあいい。後で絶対仕返しはしてやるからな……」

もうなんなんだコイツ。なんで俺は何もしてないのに恨みを買われてんだ？

「まず、あいつはいったい何なんだ？」

すると、土御門は少し言いづらそうな、ため息を吐いて、

「……あいつは悪霊だ」

言った。

「……悪霊？」

やっと、それだけが言葉として出た。

「ああ、別に存在が否定されているわけではないからな。でなきやロシア盛教にせん滅白書なんて部門があるはずがない。サーシャ達の仕事は、もっぱら幽霊退治だ」

「でも、さっぱりわからなかったっていうことは、その線は違うんじゃない？」

「いや、多分魔力の種類からして彼女たちは判別したんだ。こいつらは多分サーシャ達も見たことはない。だから悪霊と言ったんだ……幽霊とは少し違う。だが、科学部門にあるものがこれと一番よく似てると思う」



「え？ 科学分野にか？」

ああ、と土御門は相づちを打つ。

「風斬氷華だ」

上条は目を見開いた。

風斬氷華。インデックスの親友で、能力名は『カウンターストップ 正体不明』。

人間に見えるその少女の正体は、人間の形をしたAIM拡散力場の集合体。この街に住む超能力者が無意識のうちに放っていた、極少の力場が作り出した一人の人間。

と、そこで上条はハツとする。

「おい、連中の正体って、まさか――」

「ああ、恐らくは風斬の魔術バージョン。魔力が集結し、実体化したものがあいつらだ。元々の幽霊だつてそう、死んだ魔術師なんかが持っていた魔力が、行き場を無くして互いに集結したのがそれだからな。構造は全く同じものだに見える」

今までの女子生徒昏睡事件の犯人。それが、悪霊――？

「ま、だからかな。普通は魔力を判別できる視力がなければ見えねえ。俺はともかく一般人は見えないはずだ」

「ちょ、ちよつと待てよ土御門、それならおかしいじゃねえか。なんでこの娘は見えたんだ？」

一般人が見えないなら、この娘はなぜ見えた？

まさか、魔術師の一味なのか？

「いやいやカミヤん。こっちは単純だぜい。少なくともその娘は魔術師じゃないし、少なくとも見えてもおかしくない」

は？ と上条は聞き返した。

どういうことだ？ 土御門の言っていることは支離滅裂だ。一般人には見えないなら、なんで――

「AIMだよ、カミヤん」

と、上条の疑問に答えるようにして土御門が続ける。

「まあこれこそ仮説にしかすぎないことなんだが…恐らく奴らと空気中のＡＩＭが共鳴するんじゃないか？ 例えば、先ほどの化け物が動くと、空気系統の能力者のＡＩＭが反応して、音が聞こえたり。発火系統の能力者のＡＩＭが反応して、体温になったりと」

つまり、この場が原因だということ。この場にいるだけで奴らは存在をかぎつけられてしまう。

「おいおいおい、それだとかかしいじゃねえか。俺や一般人にも見えておかしくねえのに、俺や、少なくとも一般人は見えてねえぞ？」

「それは、超能力者じゃなきゃ感知できない部分もあるからだろ。無能力者（レベル０）だろうと、互いの能力に反応することだってある。が、一般人はまず超能力者ですらない…お前は、何が原因かわかるだろ」

上条は、右手を見る。

イマジンプレイカー

幻想殺し。魔術でも超能力でも、それが異能の力ならば、善悪問わずどんなものでも打ち消してしまう右手。

もし、これが上条の周囲にあるＡＩＭを打ち消していたら？ 感覚として情報が伝わる前に、そのＡＩＭが消えてしまっていたら？ もちろん、上条には何も見えない。

「…だけど、それならどうやってお前は俺にあいつを見えるようにしたんだ？」

まだ、疑問は残る。

上条に見えないはずの化け物を、土御門は見えるようにした。いったい、どうやって？

「あーそれな、実はお前は見えてなかったんだわ」

「は？」

何か、土御門がとんでもない矛盾発言をした気がする。

「だーかーらー、カミちゃんにはあの化け物は一切見えてなかったっていうことですにゃ」

意味が分からない。

見えてなかった？ 見えてなかった？ ???

あまりの意味不明な発言で、上条は頭がパンクしそうだった。

「あ、え？ どゆこと？ ドユコトデスカ？ What？ Why？」

「厳密に言うて見えてるけど見えてない。カミちゃんが見えてたのは幻覚です」

「はあ？ 幻覚？」

もう意味がちつともわからない。

「つまりなカミちゃん、お前は化け物が見えてたんじゃない。俺がその化け物を完全に再現した幻覚を見てたんだよ。例えばカミちゃんは特別なゴーグルで目が見えないようにしたとするぜい？ 今のまじやどこに人がいるかさっぱりわかんねえ状況を、そのゴーグルで見ることが出来る唯一の周波の光で、外部の3D映像を作ったとするとどうなる？ そこに本物の物があるとすれば、どうなる？」

つまり、実際は見えていないものを、見えるもので完全に再現すれば、それは本物と言える。

土御門は幻覚を応用して、上条に化け物に見えるようにした。

「いやーしかしとっさに思いついたとはいえ結構うまくいくもんだにゃ、早速これを魔術側に報告すりゃ、とりあえず援軍が来るだろ。じゃあとりあえず土御門さんはこんなところにいるわけにもいかねえからトンスラします。お二人さんお元気で」

「え、お二人さんって…ハッ！！ ちょ、ちよっ——」

土御門は、電話を切った。

「…あ、あの、誰から…ですか？」

恐る恐ると、佐天は上条に話しかけた。

無理もない。電話中に騒ぎだしたり怒鳴ったり真剣な話になった

りと、上条は二十面相の如くコロコロと表情を変えたのだから。

「あー、悪友。どうしようもないバカだけど頼りにはなる」

そうですか、と佐天は相づちを打った。

「…それにしても、すごいですね」

「何が？」

「さっきですよ。あんな化け物の攻撃、片手で止めちゃうし、何より一撃で倒しちゃったんですから…私、無能力者（レベル0）だし、何もできないし…」

言葉では、彼女は上条を賞賛している。

だが、それは裏返せば『何も出来ない自分に対する嫌悪』でしかなかった。

所詮、自分は無能力者（レベル0）の役立たずなのだ、と。

「…それでもねえ。俺だって無能力者（レベル0）だしな」

「…え？」

「俺の右手にはただ単に変な力があるだけだ。まあ使いようによっちゃ役に立つもんだけど、普段は意味ないし、成績は落第寸前だし、女の子にもモテたりしねえし…あってもなくてもどうでもいいもんっつーか」

「…でも…」

「それにな」

と、上条は佐天の言葉を遮るようにして、続けた。

「この右手、邪魔になるときがあんだよ…普通の人には選択できることを選択させてくれねえし、なかったらどれだけよかったらう、って思うことだっていっぱいあるんだ」

「…そんなこと…」

「ある。選択できるものがただ違うだけで、すごいすごくないは全然ない。人は選択できることの多さより、何を選択するかどうかじゃねえのか？ その中には、俺が選択できなくてお前が選択できることだってあるぜ」

「……」

「お前が何を選択できるかは知らない。それはテメエだけが知ってるし、決めるのもテメエだ。1000の選択肢の中で自分勝手なものを選ぶ超能力者<sup>バカ</sup>より、10の選択肢の中で正しいことができる奴の方がいい。俺はそう思うけどね」

佐天は、うつむく。

確かに、そうだ。選択は、出来るものは、自分にもいくつかある。正しい選択も、出来る。

けど。

自分は、ちゃんとした選択肢を選べるだろうか？

「…もし、私が…正しいものを選ばなかったら？」

怖い。解答が、怖い。

ビクビクと怯えるように震えて、言葉を聞くのが怖かった。

「次で選べ」

だが、彼は即答した。

「誰だって間違った選択はする。でも選択は一回切りじゃねえ。この先いくらでもある。そんな時に、ちゃんと選べればいい…誰だって、選ぶことは出来るからな」

そして、きちんと答えてくれた。

「…さーてと、ここでごうしてるのもなんだな。警備員<sup>アンチスキル</sup>が来たら面倒くさいし、ここ離れようぜ——って、え？」

上条は、固まった。

佐天の目から、玉のような涙が流れ出ていたから。

「ご、ごめん！ ごめんなさい！！ お、俺、なんか悪いこと言っちゃったか？」

ヤバイ。こんなところ人にでも見られようものならダメ人間のレッテルをガムテープで張り付けられる！！

「あ…す…す、いません…」

何度もしゃくりながら、佐天は途切れ途切れの言葉で思いを伝えた。

「わ、たし…何にも…できなくて…ずっと、ぐやしくて、悲しくて…憧れは…諦められないし…他人に嫉妬してたんです…ずっと…ずっと…」

ずっと、抱えていた悲しみを、やっと吐き出せた気分だった。ずっと苦しかったのが、今やっと楽になれたと思った。

「こ、今回だって…私…ホントは…友達に、助けてもらおうと…自分で何もできないのが、悔しくて…ずっと…」

と、その時。ポン、上条は手を彼女の頭に置いた。

「大丈夫だって。次で、後悔しない選択肢を選びやあいさ」

そのまま、上条は佐天をなだめるようにして頭を撫でた。

これで、もう大丈夫。上条はそう思っていた。

「果たして次までお前らは生きているかねえ？」

突然、上条の背後から奇妙な声が聞こえた。

バツ！！ と後ろを振り返る上条。そこに立っていたのは、奇妙な欠けた仮面をつけた黒マントの男。

この学園都市では見慣れない服装をしていた。黒いマント、死装束、そして腰には日本刀。

ドクン、と心臓が脈打った。

得体の知れない感触。そこに相手がいるだけで感じる不可思議な感覚。

そして、

（なん、だ——？ 右手が…）

先ほどから何かに反応している、上条の右手。

「さつきは見事な戦いだったなあ。少女を守り、傷一つ自分はずかずに虚をいなしした…ただの無能力者（レベル0）には到底できねえことじゃねえか」

「…誰だデメエ」

上条は佐天を後ろにやる。

「ヒュウツ　カツコいいなあ、身を挺して少女を守り、戦う奴ってか。惚れるねえ？」

「…誰だって聞いてんだろ」

と、黒マントはうつかりしていたというような表情をして、

「おお、失礼失礼。自己紹介からしうか。名前はカルラ。さっきの同類って言えばわかる？　上条当麻」

上条は、ギョツとした。

…同類？

先ほどの奴と？

「いや、電話の奴、なかなか賢いなあ。しかしテメエにも俺が見えるってことは、そんだけA I Mとかいうのを共鳴させちまってるってことかなあ？」

…同類？

本当に、同類？

ブレスシャ

威圧感も、存在感も、何もかもが違う。

「ちつ、俺たちとしては学園都市の女なら誰でもよかったんだが、無能力者（レベル0）ならどうしようもないな」

ゾクン！！　と。

全身という全身が、警告反応を出した。

「姿見られたしなあ。死ねよ」

次の瞬間。男は消えた。

「な——」

突然だった。影も残さず、男は消えた。

そして、

「なんだ、この程度のスピードに追いてこれねえのか」  
ゴツッ！！　と。カルラは上条を殴った。

上条は衝撃を受け、叫ぶ暇もなく吹き飛んだ。

「？？ん？」

と、カルラは殴った方の手に違和感を感じた。

右手が、ひどく頼りないほどに薄くなっていた。

これを見て、カルラは

「…クハ、クハハハッ！」

笑った。ただ、正体不明の損傷を負っているにも関わらず、笑った。

余裕でもなく、見せかけでも、狂喜でもなく、ただ笑う。

そして、彼が吹き飛ばされた方向を眺める。

「なるほどなるほど。反射神経はいいようだな。とっさに右手を出して身を守ったか」

そこには、まだかろうじて立つ上条がいた。

だが、足はガクガクと震え、歩くことすらままならない。

「初めて見たぜ。それが幻想殺イマジンプレイカーしか。どんな原理か知らんが、俺の霊圧が消し飛ばされてんじやんかよ。クク、すげえなあ」

が、何も上条は答えない。答える余裕すらない。

「さっきのと俺を一緒にすんなよ。パワーもスピードもこっちが上。ま、そっちの右手はどうかは知んねーが当たらなきゃ意味ねえよなあ？」

違う。

さっきの化け物と同じだが、違う。

速さは、神裂と同じ…いや、それ以上に感じた。

世界に数十人しかいない、聖人。その中でも屈指の力を誇るそれよりも。

さっきのも、反応した方向にジャストで間に合っただけ。次も防げるとは、到底思えない。

グッ、と彼は拳を握り、歩き出す。

そして、

佐天を後ろにやり、カルラの行く手に立ちふさがった。

「え…」



だが、それだけだ。

それがどうした。速いとしても、一度でも彼が捉えればそれで終わりだ。

攻撃力も、防御力も、彼の右手に分がある。

ジャストであつたにしても、間に合うには間に合った。

戦える。十分に。戦える。

「な、なんで…」

「…なんでこうしちまうかな、俺…」

ヒュー、ヒューとおかしな呼吸をしながら、上条はかすれた声で言う。

「…悪いけど、こういうタチなんだよ、俺…」

そして、最後に強く言う。

「これが、俺の選択肢だ」

ヒュウツ、とまたカルラは口笛を吹く。

「なんでそこまで出来るかねえ？ そいつはお前の彼女ってわけでもなさそうなんだけどなあ。さっきの様子だと」

見下すように、けなすようにカルラは、

「つーかそいつ、ただの無能力者（レベル0）だろ？」

言った。

「ここでは優等生が最上位。なのにそいつは何も出来ない無能力者（レベル0）ときたもんだ。そんなの守って何かがある？ 何か得することでも？」

続ける。カルラは、続ける。

「みんなは超能力者。そうでなくても出来ることがいっぱいあるのにお前はなに？ 何が出来るか教えて〜？」

決る。彼女の心を、決る。

「ねえ返事ぐらいしてくれたっていいじゃん。何がでーき??」

「選択です」

だが、

「…あ？」

カルラは、豆鉄砲を喰らったような表情になる。

「私にも出来る、最上の選択です！」

もう迷わない。

もう屈しない。

私は、自分がやれることをやる。その意志で、彼女はそこに立つ。

「この人が教えてくれた！ 選択肢の多い少ないじゃなく、選択で自分を示すこと、それを私はする！ 出来る！！」

彼女は、戦う。

どんなものにだって、戦ってみせる。

それが、彼女の選択。

最上の、最高の、最難の選択。

「…あーあ、しらけた」

カルラは、笑みを消した。

その顔には、もはや殺意しかない。

「もうちつと遊びたかったが、こりゃダメだな」

殺意と悪意を、極端なまでに持ち合わせて、カルラはそこに立つ。これが、彼の選択。

自身の力ですべてをねじ伏せる、最も邪で、最も簡単な選択肢。

「もういい。死ねば？」

また同じように、カルラが消えた。

いや違う。同じではない。

先ほどよりも、速く、速く、鋭く加速する。そして、



上条は気づく。

自分に、全く傷がないことに。

「!？」

上条は、目を開ける。

そこにあつたのは、巨大な包丁。

鍔に晒が巻いてあり、普段はそれで刀身を巻くのか、異常なほど長いものだった。

その、一本の出刃包丁が。

カルラの一撃を、易々と防いでいた。

「なっ!？」

カルラは、信じられない。

これは何だ？ どこから来た？

いつ、どうやって!？」

（いや、それよりもどうして自分の一撃を、傷一つ無しに受け止められた!？ いったい、どんな力を…!？）

「よお…」

と、そのときだった。

「こんな真つ昼間から、随分派手にやらかしてんじゃねえか」  
声が、空から聞こえた。

反射的に上を見るカルラ。そこにいたのは。

「暴れた分は、キッチリ払ってもらうぜ」

死装束。オレンジの髪。そして、腰につけた死神代行書。

「死神代行、黒崎一護。仕事、やらせてもらうぜ」

遅れてきたヒーローが、地上へと舞い降りた。

## 無能力者（レベル0）（後書き）

前略にもあったように、次週からはしばしお休みさせていただきます。誠に申し訳ありませんm（| |）m

がんばって書きますんで、書けたら出します（^ | ^ ;）

虚と戦うは……（前書き）

お久しぶりです、みなさん。

五ヶ月小説執筆を断念していたkyouyaでございます…（

なんとかして続きを書かねばと思い、また吐血でもちよくちよくしながら執筆し始めました。

ではどうぞ

虚と戦うは……

ギョリギョリギョリギョリギョリギョリ……と。

一護の刀と敵の刀が互いを削り、互いを振るう主人の肉を斬り飛ばすべく、その刃を鋭く走らせる。

「らアッ……」

「すアアアッ……」

互いに咆吼を上げ、瞬歩しゅんぽと響転ソニード、斬撃の応酬を繰り返すこと、すでに三桁を越える。

そして、

その行為にかかる時間、およそ、一分。

(……なん……だよ、これ……)

上条は、啞然としてその光景を見渡していた。

とてもじゃないが、自分が飛び込めるような場所ではなかったからだ。

アクセラレータ

一方通行、ステイル、マグヌス、神裂火織かんざきかおり、ヴェント、アックア、ファイアンマ……

彼が死闘を繰り返してきたどんな者も、人と見れるような生半可な力を持っていなかったし、実際自分が負けていたことも、あり得る戦いだっただ。

だが。

(……そんなもんじゃねえ……)

それでも、彼の経験からでも。

この戦いは、もはや誰とも比べられないような感覚がそこにあった。

…いや、

(……これは、もう……)

彼は、その場にいるだけでピリピリと感じるこの空気を、二度ほど感じたことがある。

(天使同士の戦いじゃねえのか？ これ)

「……すごい……」

と、そばにいた佐天は、一言だけそう言った。

それだけで充分……というよりか、それ以外に言いようがなかった。

「…彼、何者なんですか？ 私たちを襲ってきた男と、何か関係が……？」

「いや…わからねえ…だけど、味方だと思っっているのか？」

「……でも、なんかあれ、超能力者…なんですか？ あんなの…」

…」

上条は、その問いに対しては何も言えなかった。

確かに、超能力とは言えない。あんなのが学園都市で作り出されただけならもはや世界が壊れてしまうだろう。

だが…上条は、まだあんな魔術にも出会ったことがない。

聖人に近いが、おそらくそれより三段も四段も差が開いている。味方かどうかはわからない。

だが、



「……今はあいつに頼るしかないみたいだ」

そんな会話が続く中、一護と虚は死闘を凄まじい勢いで展開させていた。

もはや公園は原型を止めていない。やわらかい地面はほぼすべて抉られたように黒い土をさらけ出し、そこらへんにあったベンチなんかは粉々に粉碎されている。

一護は、虚に向けて斬りかかったが、

「ははっ」

虚は、その斬撃を刀で受け流す。

「もう君の動きは見切ったって。遅い遅い！」

そして虚は、一護の胸に手をかざす。  
死神を虚へと変貌させる、その手を。

## 正体（前書き）

突如力を蘇らせた一護。

一体彼の身に何があったのか……？

その鱗片が、今明かされる。

## 正体

初めての感覚が、自分の中を通るのを上条は感じた。

自分の中で、じわじわとある感覚がくすぐられていくのが分かる。恐怖でもない。重圧でもない。

なにも上条に起こっていないのに、上条は自分の体が生きているのか、そんなことを逐一確認せねばならなかった。

体の感覚が、一瞬奪われ、そしてそのまま帰ってこない。

そんな感覚とも言い難いようなものが、上条の中にあった。

ちらと、上条は隣にいる佐天を見た。

小刻みに震え、目がそこから飛び出るのではないかと思うほど見開き、何度も自分の胸に手を当てる。心臓がちゃんと動いているか、自分が生きているのか何度も確認するように。

(……なん、だよ……あれ……)

上条が見ていたのは、佐天でも襲いかかってきた男でもない。助けに入った、巨大な出刃包丁を持つ男の。異常な姿だった。

そこから発せられる、黒いイメージの予感を……それを、知る人はこう言う。

??絶望??と。

「……なんだよ……」

上条ではない。一護に、魔の手を差し伸べたはずの男がそうつぶやく。

確かに自分はその手を一護に向けた。そして力を行使した。

そして、明らかにその効果は現れている。

目の前にあるのは、先ほどの一護ではない。

胸にあいた孔。異常なほど白い肌。伸びた爪。獣のような赤い毛。そして……

「なあ、なんで仮面が一部しか出てないんだ!？」

中途半端に、一護の頭部から生え出た仮面の角が一对。

織姫と石田、そして今は存在しない破面<sup>アラソカル</sup>しか知らないその姿にそれは酷似している。

先ほどは明らかに違う。

姿も。様子も。そして霊圧の禍々しさも。

まさか……

「デメエ、」

まさか……

「まさか、お前は……ッッ!!」

この男、死神じゃない？

その瞬間、一護は出刃包丁で男の胸を切り裂いた。叩きつけても火花を散らしあうしかなかった、その男の刀とともに。

「ゴッ……!？」

悲鳴を上げる暇はない。

それより速く、一護の刀は精密機械以上の精度で切り刻む。もはや、男は四肢がまともな形でくっついていなかった。

「お…まえ…ツツ…ま、さか…！！」

一護は、止まる。

そして、冥土の土産のように、男に解答をはき出した。

「ああ……」

「俺は、アランカル破面だ」

男は、次の瞬間仮面を真っ二つにされて、消えた。

## 正体（後書き）

……この話まで持ってくるのにどれだけ時間かかっているのやら。  
うーんしかし、この話でだいぶ読者から反感買いそうな感じがす  
る……

先に謝るところ!! ごめんなさい!!

『誰』

上条は、なにも出来ずにいた。

気分は最悪だ。いや、最悪かどうかもわからない。

彼は、まるでありとあらゆる血管を見えない手で力一杯締め付けられているような錯覚に陥っていた。

それほど、その男の存在感・・・プレッシャーが大きかった。

(・・・なんだってんだ・・・いったい・・・)

上条は、震える。

目の前の男を、味方と思いたい。実際彼は自分たちの窮地を救ってくれていた。

だが・・・彼の脳裏を、ある考えが埋め尽くしていた。

この男は、味方なのか？

この男が、もし自分たちに今襲いかかってきたら？

実際助けてくれた。だが、その強大かつ凶暴な迫力を見せつけるその男が、心底上条は怖かった。

例え、この世のあらゆる聖人、天使を味方につけることができたとしても、目の前の男に、勝てる気がしない。

そんなデタラメで凶暴な強さを持つ男が目の前にいるのだ。

と、そのとき。

「・・・おい」

男が、上条に話しかけてきた。

「あ・・・」

突然のことで、上条はどうすればいいか一瞬わからなかった。  
が、とにかくなにかしらの反応をしなければならぬと思い、焦  
って、

「お、お前．．．．．なんなんだ？ その姿」

そんなことを、聞いてしまった。

後悔した。だけど、もう言葉は上条の口から逃げた。

その瞬間、男は鋭い眼光を光らせ

ダラダラと汗を流し、苦悩にゆがんだ表情になった。

「．．．．．！！！」

「．．．．．．．．．．．？」

男は、なにか悩みだした。

（ちくしょう、死神の姿が見える人間がいるなんて誤算だ！ う  
ん．．．どうする？ この場で『死神で』す』とか正直に答え  
たって返答は『病院いつてきなさい、最新鋭のMRIとか備わって  
るから』とかになりそうだ。だってここ科学の街だぜ？ そんな超  
科学現象信じるわけがねえ。あ、でも超能力があるくらいだしそれ  
くらい当然か。いやしかし俺あの野郎が死ぬ寸前に『俺は破面だ』  
って堂々と告白．．．．．あ、一般人がそんな言葉知ってるわけ  
がねえ、『超能力者で』す』っていうテンションで答えりやそれ  
で．．．．．ダメだ、俺もう超能力以上にヤバいこと目の前でし  
ちまったし、なんだこのカッコ、野生人か！ いやでも、じゃあこ  
こはどう答える？ どう答える！？）

「??？」



いきなり男が唸りだして、頭を抱えた。

上条はいきなり男の態度の豹変に、首をかしげた。

「．．．．．あ、あの〜」

「あ、ああ．．．うゝん、その、なんだ？ ホラ、あれだよあれ．

．．．．．あれ？」

「?? ? ??」

なんか、よくわからんが、ピリピリしていた空気がなくなっただよな気がする。代わりになんか声をかけづらくなっちゃったけど。

「あの．．．」

と、隣にいた佐天が上条に話しかけてきた。

「あ．．．なに？」

「あの．．．．．この人、敵ではないんですよね？」

と、佐天が上条に尋ねた。

上条は、もう一度目の前の男を観察する。

ここらでは見ない、黒いコート。おそらく学園都市最強の超能力者（レベル5）、一方通行よりもひどく白い肌。<sup>アクセラレータ</sup>一瞬で長く伸びた髪の毛。間接部のところどころに生えた赤い獣毛。頭から生え出た二本の角。巨大な出刃包丁。

そして、胸にぽっかり空いた穴。

どう見たって普通の人間ではない。コスプレイヤーにしたってメチャメチャだし、角も飾りじゃなく本当に生えてるような気がする。加えて、さっきの戦い。もはや超能力も魔術も関係なく、すべてを超越していた、あの力。

．．．．．だけど、なんか人間臭い。

なんか、猜疑心を抱くのが、さっきと違って出来ない。

上条は、意を決してもう一度男に尋ねてみることにした。

「．．．．．あの」

「．．．．．なんだ？」

「あんた、その．．．．．なんなんだ？　いきなりどつかから  
現れて．．．．．その格好にしろ．．．．．そのデカイ出刃包  
丁にしても．．．．．」

「．．．．．あー．．．」

男は、また悩んだ。そして、苦し紛れにこう答えた。

「あゝあれだ。まあ、その．．．ヒーロー？　野生の？　うん．．  
」

「．．．．．」

「。」

「．．．．．」

「、」

「．．．．．」

「．．．．．」

．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．

男が後悔するほどの、痛い沈黙。  
そして。

「ぶっ  
」

上条が、吹き出した。

「は、はは、あははっ！」

それにつられてか、佐天も笑った。

「なんだよ！ 笑うなよ！」

「だ、だって．．．や、野生の．．．ヒ、ヒーロー．．．．．ぶくく」

「お、おなか痛いです．．．．．く、くうっつ」

一気に、緊張の糸が解けた気がした。その分、すごく安心して、笑ってしまった。

「笑ってんじゃねーよ！ 実際助けたからヒーローみてえなもん  
だぞコラ！」

「あ、いや、悪い悪い．．．．．野生のヒーロー」

「野生のヒーローじゃねえ！ 黒崎一護だ！！」

怒鳴られたからか、笑うことをやめた、上条と佐天。  
お詫びを入れようと、口を開いた上条が。

「あ、ああ．．．．．あ？ イチゴ？」

ハッ！ とする一護。

その瞬間、長年の経験から、いやな予感がした。

「．．．．．イチゴちゃん？」

そこまでなら、まだよかった。

また、よけいなおまけが付録していた。

「．．．．．野いちご？」



か？

「．．．そう、だったな。いきなりこんなが出てきたら、誰でもビビるか」

「あ、いや．．．まあ．．．そのよ．．．」

こう言い詰まる上条に対して、一護が感じたのは悲しみだけではなく、少しの喜びだった。

自分のことを人間だと認め、自分を化け物だと思い恐怖していたさっきの自分に恥じらいを持つ彼が、優しく見えた。

「まあいいよ。こんなじゃ当然誰からも怖がられちゃうさ。そこらへんは俺わきまえてるさ。野生でも」

若干の冗談をふまえて、彼は大丈夫だというように手をぶらぶらと振った。

「．．．．．」

「ま、そういうことだし全然大丈夫だ。じゃあ」

「全然大丈夫じゃねーよ」

俺はこれで行くよ、と言おうとした一護の言葉は、上条が放った言葉に遮られた。

「確かに俺はちょっとビビっちゃったけど．．．でも、それで前がそんなことでいいとか、そんなんでも大丈夫とか納得しちゃうのは、いやだ」

「．．．．．」

「なんかあるのかもしれないけどよ．．．それ自体も聞けねーでどっか行かれちゃうってのはいやだ」

一護は、ただただ上条の言葉を聞くだけだった。

いつの間にか、去ろうとしていた一護の意志は、目の前のシンツン頭の少年を意識することになっていった。

そんな一護の気持ちを、上条は知らない。

ただ彼は、同じような感情を無意識のうちに理解した。

もう彼が覚えているはずのない記憶。インデックスと初めて会って、なにも言わず去ろうとした時の気持ち。

すべて忘れたはずの、あの記憶。

「もっかい聞けどよ．．．あんた、なんなんだ？　いつたい何者なんだ？　嘘は言うなよ。黙るとか卑怯なのもダメだ。教えてくれよ」

その言葉だけで。一護の気持ちから、ちよっぴりの暗い悲しさは消えた。

少しだけの間の、沈黙。そして、

「．．．なんつーかよ．．．いいな、お前」  
「は？」

本人でもおかしいと思うような、その奇妙な一言。

上条は、キョトンとして一護の顔を見た。

「いいや、なんでもねえ．．．さて．．．じゃあ、軽く話してみるか」

適当にごまかす一護。

一護は、斬月ざんげつの刃に晒を巻きながら口を動かす。

「俺は．．．」

重い口を、ゆっくりと開き、そして動かす。

まるで、聖者の目の前で許しを乞い、罪を懺悔する極悪人のように。

「俺は．．．あいつは．．．」

その瞬間、一護の顔に仮面の一部が現れた。

「！？」

それとともに、一護から凶悪な霊圧と殺気が噴出した。

「な!？」

「!!」

一護は焦燥した。

この感覚。この何かが足りないこの感覚。

その何かを満たしたい感覚。

これは。

この感情は。

(やべえ・・・! 腹が減ってきた・・・!!)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4197n/>

---

BLEACH × とある魔術の禁書目録 Darkness World（黒キ世界）

2011年9月27日00時15分発行